

宇宙の電磁的性質

高橋慶太郎

京都大学基礎物理学研究所

2007年7月24日@関西合同ゼミ

共同研究者

宇宙の電磁氣的性質

- ・ 市來淨輿 (RESCEU)
- ・ 杉山直 (名古屋大)
- ・ 白水徹也 (東工大)
- ・ 小林努 (早稲田大)
- ・ R. Maartens (Portsmouth)

磁場の観測

- ・ 市來淨輿 (RESCEU)
- ・ 井上進 (国立天文台)
- ・ 長滝重博 (京大基研)
- ・ 村瀬孔大 (京大基研)

概要

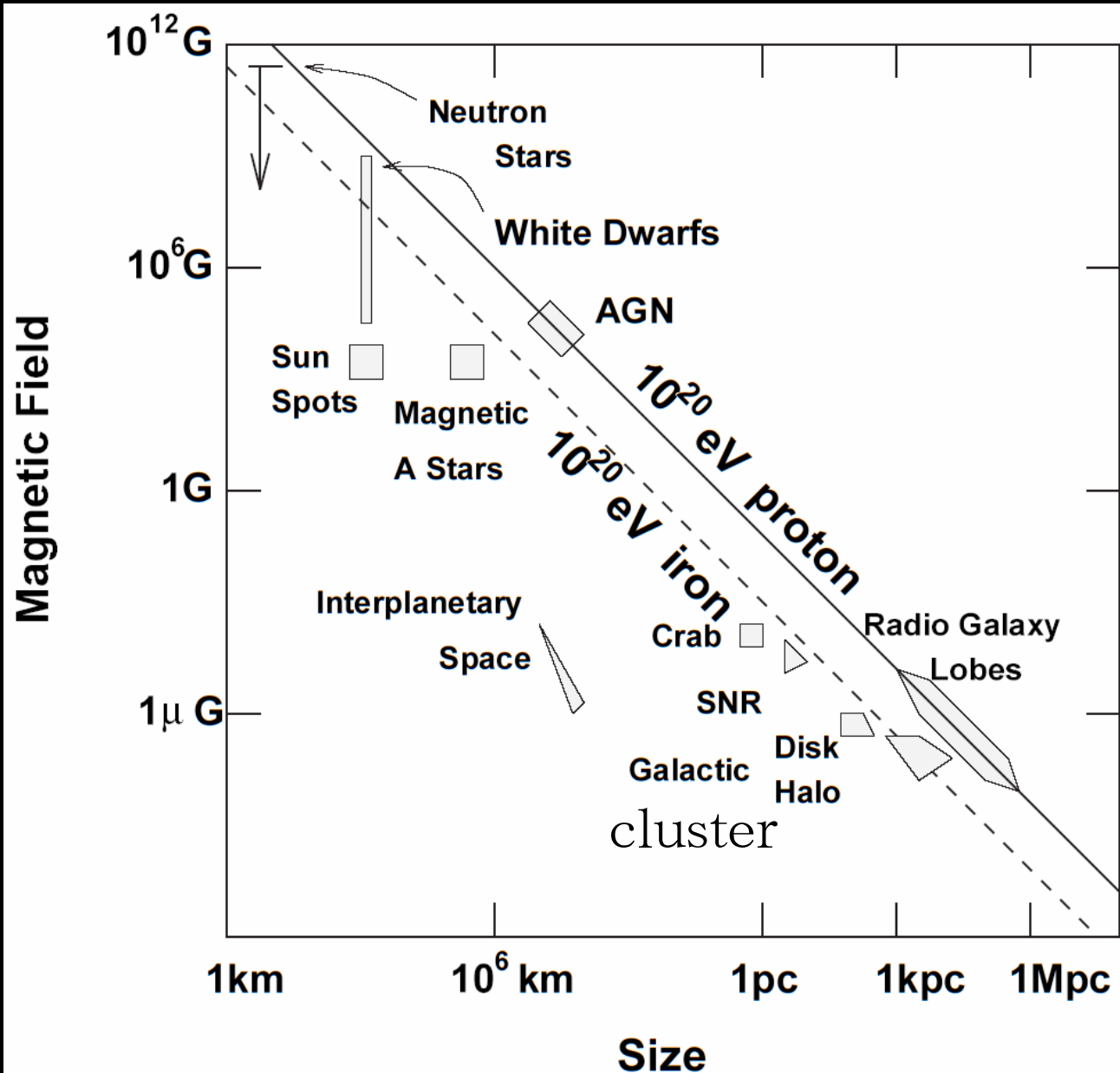
- 1、宇宙論的摂動の2次の効果による磁場の生成
- 2、磁場だけでなくその他の電磁氣的性質を求める
- 3、高エネルギー天体による弱い磁場の測定
- 4、2次摂動によって小スケールのゆらぎを探りたい

目次

- 1、宇宙磁場
- 2、2次摂動
- 3、強結合近似
- 4、Maxwell + Ohmを解く
- 5、トムソン項を解く
- 6、宇宙磁場の観測と . . .
- 7、まとめ

1、宇宙磁場

ユビキタス磁場



磁場は至る所にある

地球

太陽

銀河

銀河団

・

・

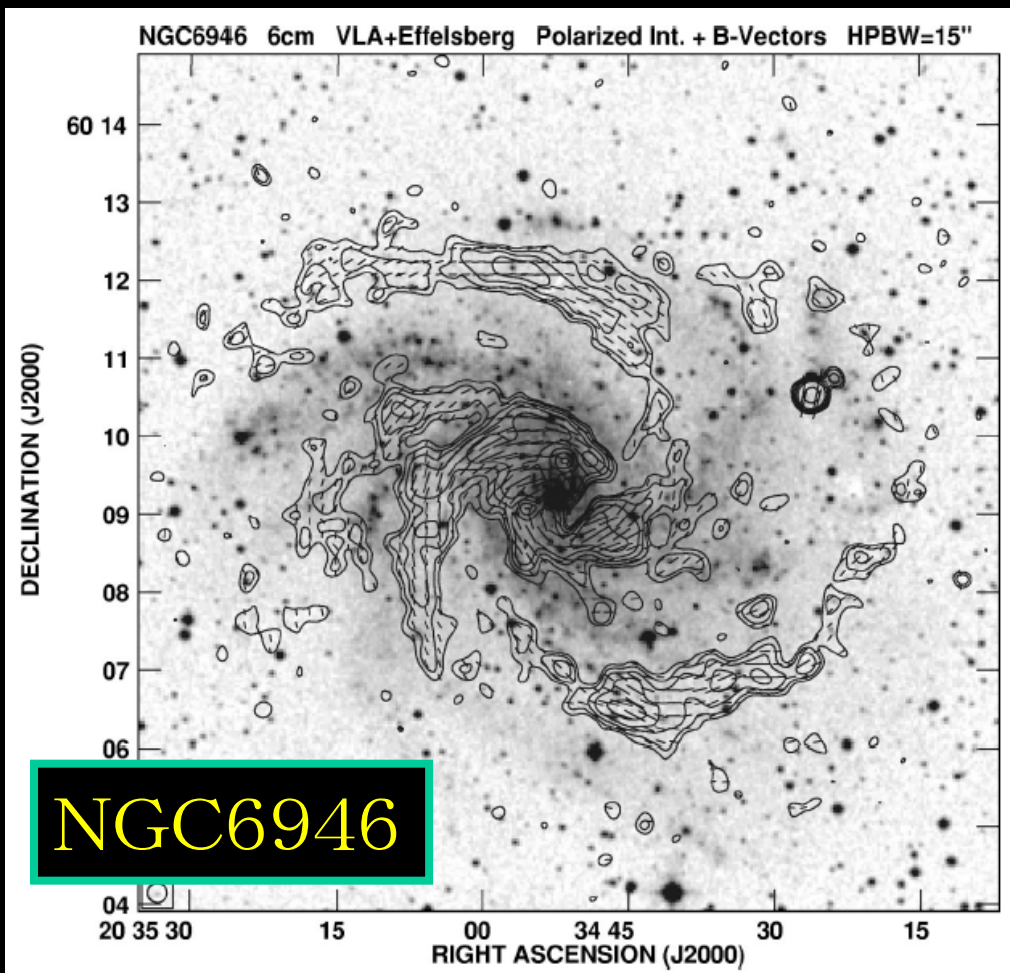
・

磁場の起源？

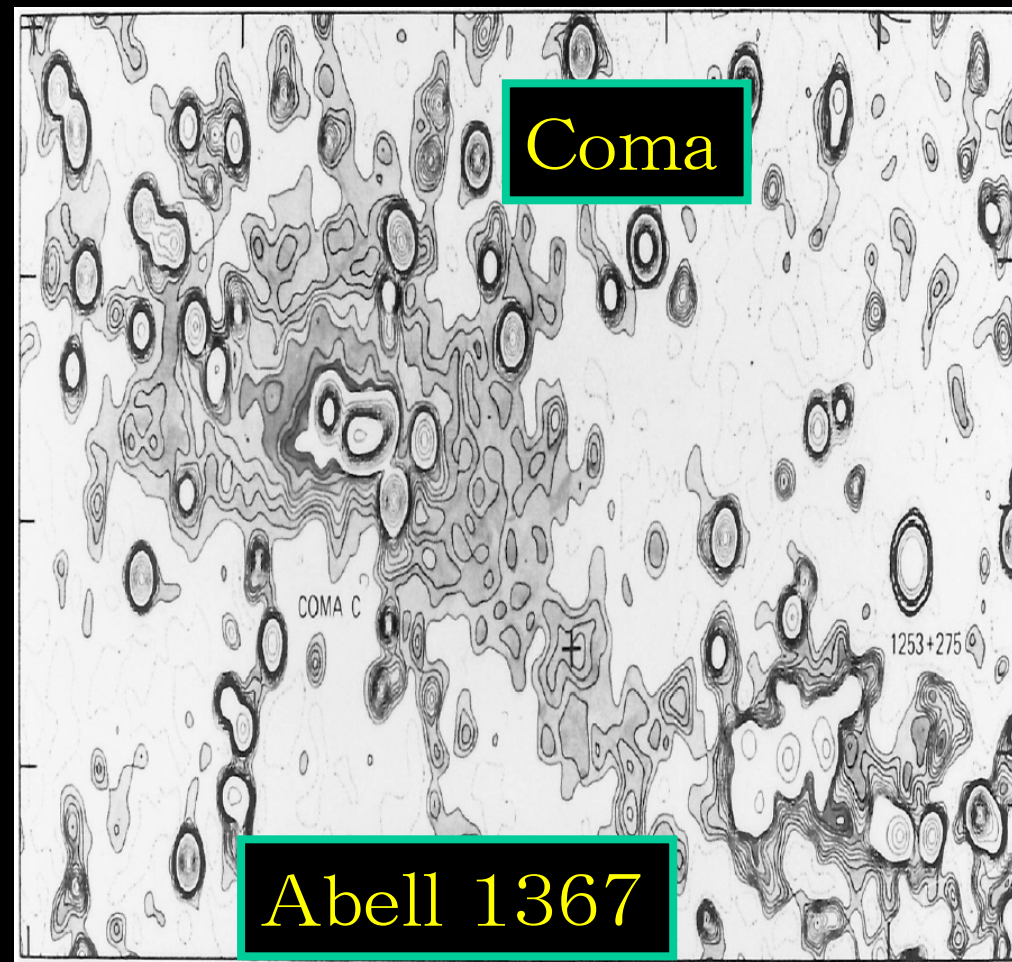
宇宙論的磁場？

宇宙進化への影響？

観測例



渦巻銀河 $\sim 10 \mu G$
Beck & Hoernes, 1996



銀河団 $\sim 1 \mu G$
Kim et al., 1989

宇宙論的磁場への制限

ビッグバン元素合成

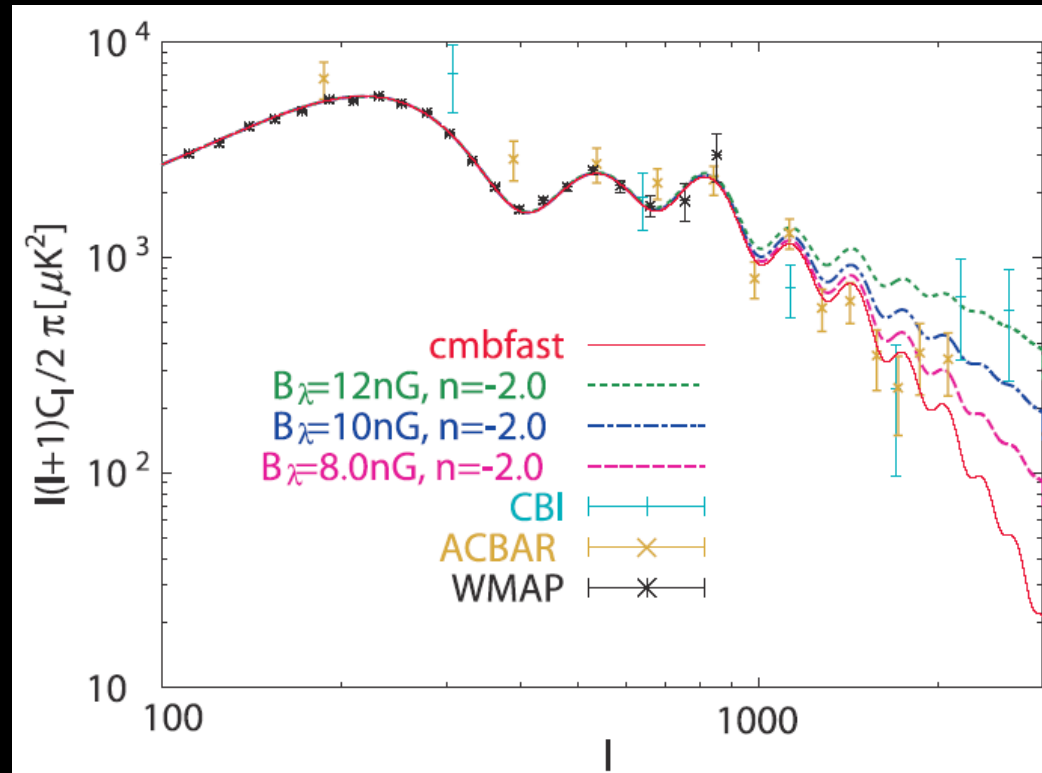
- ・ 宇宙膨張則
- ・ 弱い相互作用の反応率
- ・ 電子の相空間の構造

CMBゆらぎ

- ・ 小スケールの温度と偏光ゆらぎができる

$B < 20\text{nG} @ 1\text{Mpc}$
(Yamazaki et al., 2004)

$B < 10^9\text{G} @ T = 10\text{keV}$
 $B < 1\mu\text{G} @ \text{現在}$
(Cheng et al., 1996)



磁場観測の現状

	強さ	スケール	観測方法
銀河	$O(10) \mu G$	\sim 銀河	synchrotron
銀河団	$O(1) \mu G$	\sim 銀河	Faraday
遠方銀河	$O(1) \mu G$	$> 1\text{kpc}$	Faraday
宇宙論的	$< 0.01 \mu G$	$\text{Mpc} \sim$	BBN, CMB

銀河・銀河団磁場の起源は？
宇宙論的磁場は存在するか？

ダイナモ

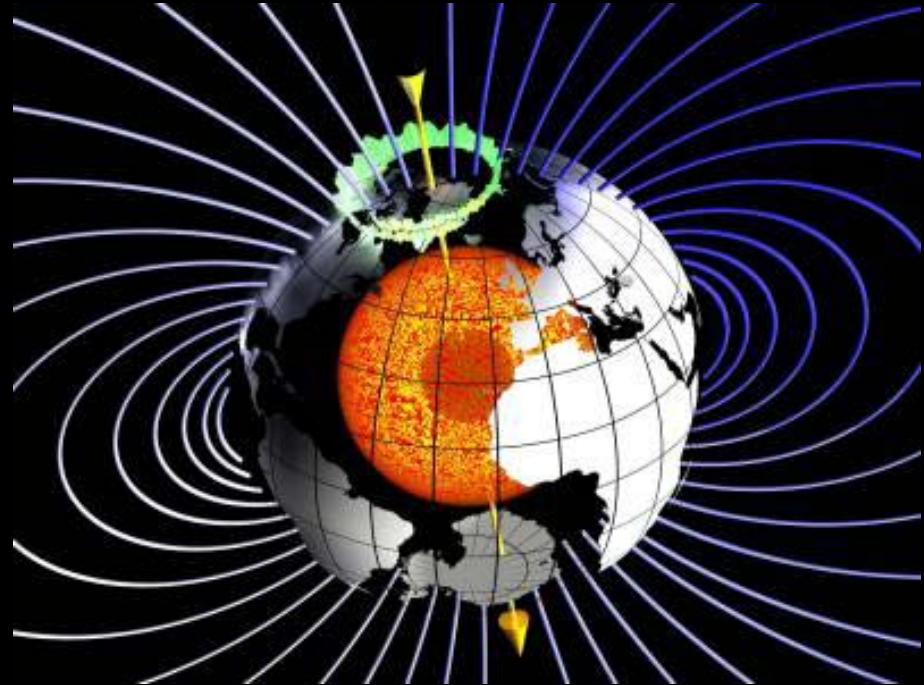
磁場の増幅・維持機構

- ・ 電磁流体力学的不安定性
- ・ 乱流

宇宙の様々な所で働いている

- ・ 地球：外核の運動
- ・ 太陽
- ・ 降着円盤：MRI
- ・ 銀河？銀河団？

$\alpha - \omega$ dynamo、 kinematic dynamo、 MRI . . .



ダイナモの特徴

- 1、種磁場が必要
→ ゼロから磁場を作ることはできない
- 2、種磁場を指数関数的に増幅
増幅時間 \sim 回転周期
- 3、磁場の back reaction が効き始めると終了
→ 磁場とガスでエネルギー等分配

必要な種磁場

どのくらいの強さの種磁場が必要か？

① 銀河形成以前に磁場が存在する

② 銀河形成のときガスが圧縮される
 $\delta \sim 10^6 \rightarrow$ 磁場は4桁増幅

③ その後ダイナモで増幅 ($z=10 \rightarrow 0.5$)
 $\log e^{\wedge}(80 \text{ 億年} / 2 \text{ 億年}) \sim 17$
 \rightarrow 宇宙年齢で17桁増幅される

銀河磁場が $10 \mu\text{G}$ だとすると必要な種磁場は

$$B_{\text{seed}} \sim 10^{-26} \text{ G} \rightarrow 10^{-29} \sim 10^{-23} \text{ G}$$

磁場の進化シナリオ

$z = 0$ 銀河 $O(10) \mu G$

銀河団 $O(1) \mu G$

$z \sim 1$ 遠方銀河にも磁場？

銀河ダイナモ (銀河団ダイナモ？)

$z = 5 \sim 10$ 種磁場生成(astrophysical)

first star、原始銀河、再イオン化

$z \sim 1000$ 種磁場生成(2nd order)

$z \gg 1000$ 種磁場生成(cosmological)

inflation、相転移

これまでの研究

astrophysical origin

- ・ Biermann機構（非熱的過程での磁場生成）
原始銀河、再イオン化・・・
- ・ Weibel不安定性

→ 現象そのものがよくわかっていない

cosmological origin

- ・ 相転移
- ・ インフレーション

→ 物理がよくわかっていない

確かのことはなかなか言えない

2nd order

輻射優勢期 ～ 再結合時の宇宙論的摂動

first orderでは磁場は生まれない

second orderで生まれる？

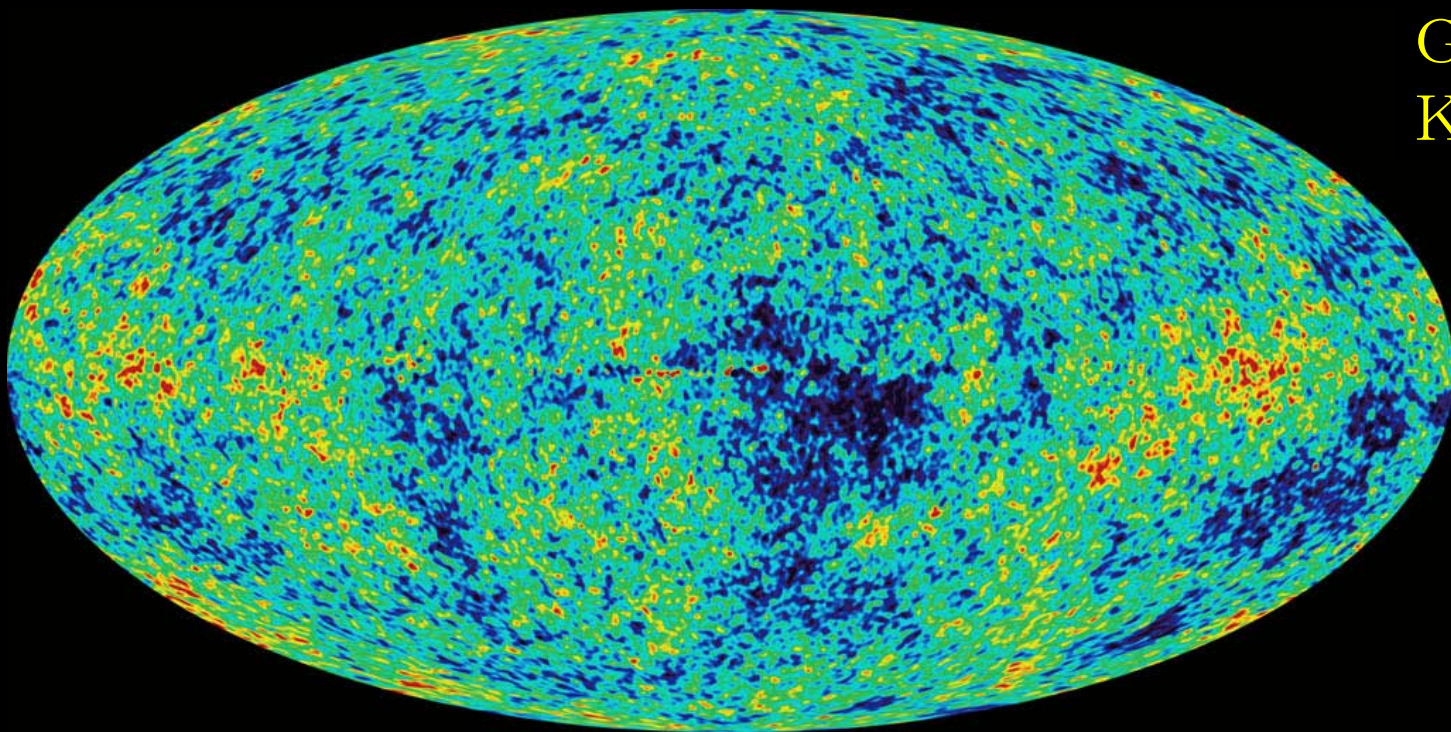
Hogan, 00

Berezhiani & Dolgov 04

Matarrese et al. 04

Gopal & Sethi, 04

KT et al. 05, 06, 07



物理はよく
わかっており、
観測的にもよく
理解されている

宇宙磁場のまとめ

宇宙における磁場

小～大、様々なスケールに存在
起源 (銀河)

ダイナモで増幅

種磁場必要 ($10^{-29} \sim 10^{-23} \text{G}$)

磁場生成

astrophysical

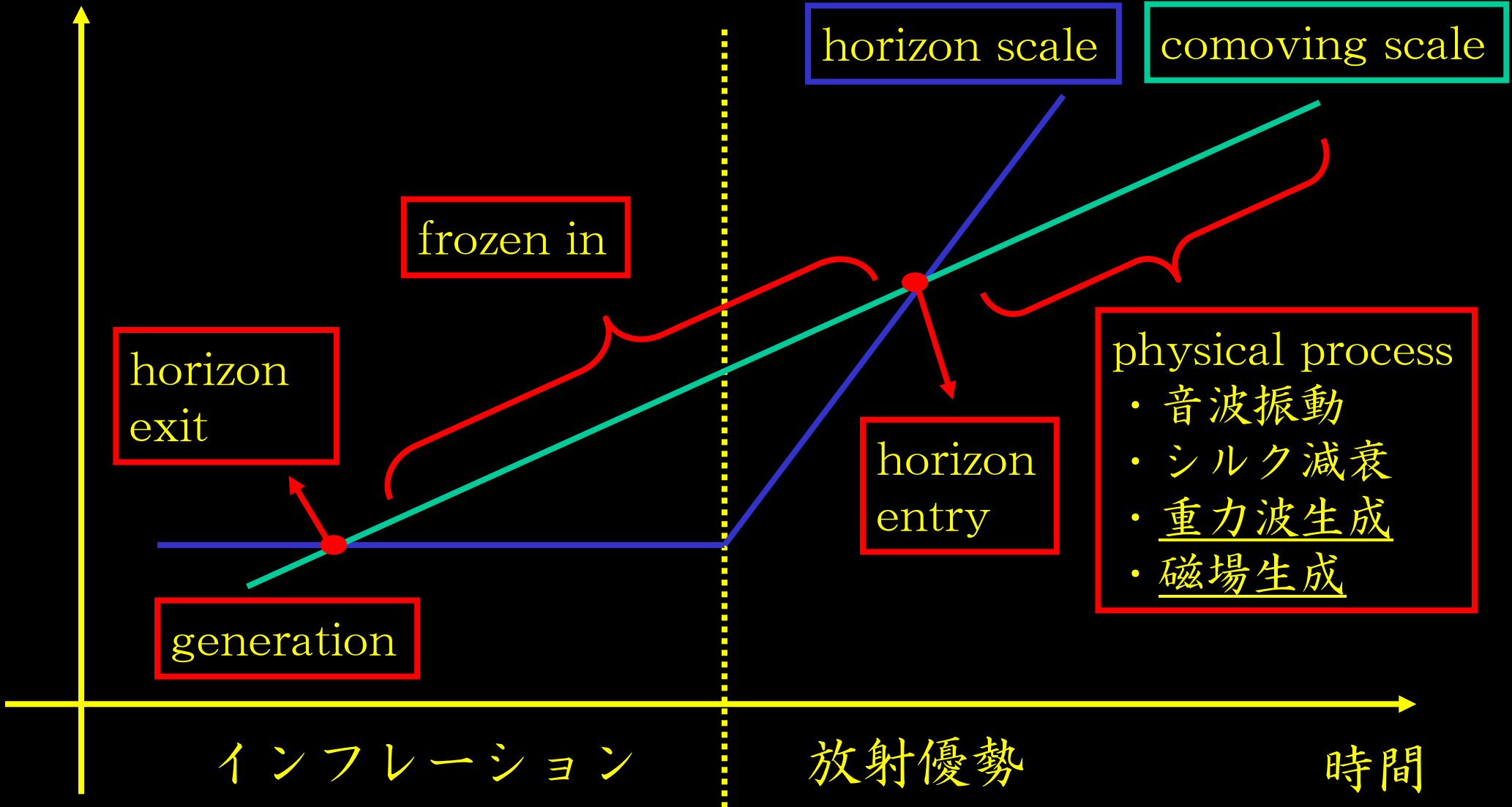
cosmological

2nd order → 曖昧さほとんどなし

2、2次摂動

ゆらぎの時系列

大きさ



mode mixing

2次スカラーの方程式

$$\square\Phi^{(2)} = (\dots)$$

$$V^{(1)i}V_i^{(1)}, \quad h_{ij}^{(1)}\partial^i\partial^j\Phi^{(1)}, \quad h_{ij}^{(1)}\partial^iV^{(1)j}$$

2次のスカラーは1次のベクトル・テンソルから作ることができる → mode mixing!!

逆に、2次のベクトル・テンソルのソース項には1次のスカラー（の積）が存在する

- vector $\dots \partial^j(\partial_i\Phi^{(1)}\partial_j\Psi^{(1)} - \partial_j\Phi^{(1)}\partial_i\Psi^{(1)})$
- tensor $\dots (\delta_i^k\nabla^2 - \partial_i\partial^k)(\partial_j\Phi^{(1)}\partial_k\Psi^{(1)} - \partial_k\Phi^{(1)}\partial_j\Psi^{(1)})$

ただし純粋に2次の量同士は混合しない

方程式の構造 (零圏気) I

計量の展開

$$g_{\mu\nu} = g_{\mu\nu}^{(0)} + \delta g_{\mu\nu} = g_{\mu\nu}^{(0)} + g_{\mu\nu}^{(1)} + g_{\mu\nu}^{(2)} + \dots$$

アインシュタインテンソルの展開

$$G_{\mu\nu}(g_{\mu\nu}) = G_{\mu\nu}(g_{\mu\nu}^{(0)} + \delta g_{\mu\nu})$$

$$\begin{aligned} \text{テイラー} \\ \text{展開} &= G_{\mu\nu}(g_{\mu\nu}^{(0)}) + \frac{\partial G_{\mu\nu}}{\partial g_{\alpha\beta}}(g_{\mu\nu}^{(0)})\delta g_{\alpha\beta} + \frac{1}{2} \frac{\partial^2 G_{\mu\nu}}{\partial g_{\alpha\beta}^2}(g_{\mu\nu}^{(0)}) (\delta g_{\alpha\beta})^2 + \dots \\ &\equiv G_{\mu\nu}^{(0)} + G_{\mu\nu}^{(1)} + G_{\mu\nu}^{(2)} + \dots \end{aligned}$$

アインシュタイン方程式 (真空)

$$G_{\mu\nu}^{(1)}(g_{\mu\nu}^{(1)}) = 0$$

$$G_{\mu\nu}^{(2)} = G_{\mu\nu}^{(2)}(g_{\mu\nu}^{(2)}) + G_{\mu\nu}^{(2)}((g_{\mu\nu}^{(1)})^2) = 0$$

方程式の構造（零圏気）Ⅱ

各オーダーのアインシュタイン方程式

$$G_{\mu\nu}^{(1)}(g_{\mu\nu}^{(1)}) = 0$$

$$G_{\mu\nu}^{(2)}(g_{\mu\nu}^{(2)}) = -G_{\mu\nu}^{(2)}((g_{\mu\nu}^{(1)})^2) \equiv \kappa^2 T_{\mu\nu}^{\text{grav}}((g_{\mu\nu}^{(1)})^2)$$

テイラー展開 1 次
→ 同じ構造

テイラー展開 2 次
→ ソース項

例：テンソル

$$\square h_{ij}^{(1)} = 0$$

$$\square h_{ij}^{(2)} = f \left[\left(\Phi^{(1)} \right)^2, \Phi^{(1)} h_{ij}^{(1)}, \left(h_{ij}^{(1)} \right)^2 \right]$$

- ・ 純 2 次は分離
- ・ 2 つの 1 次の量の積が 2 次の源になる

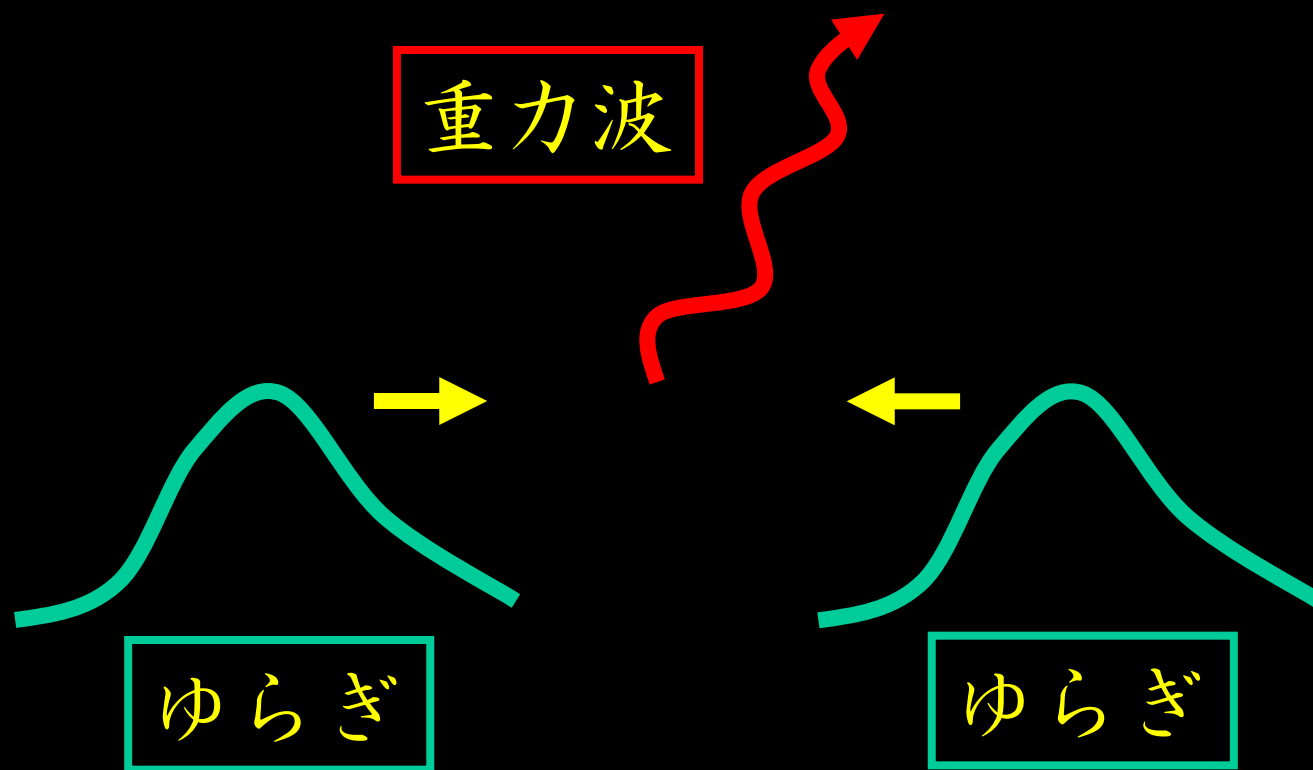
簡単な応用：重力波

2次摂動による重力波生成

- ・インフレーション後にsubhorizonで古典的に生成
- ・1次のスカラーゆらぎから生成
- ・2次の非等方ストレスは無視

Baumann, Ichiki, Steinhardt & KT, 07

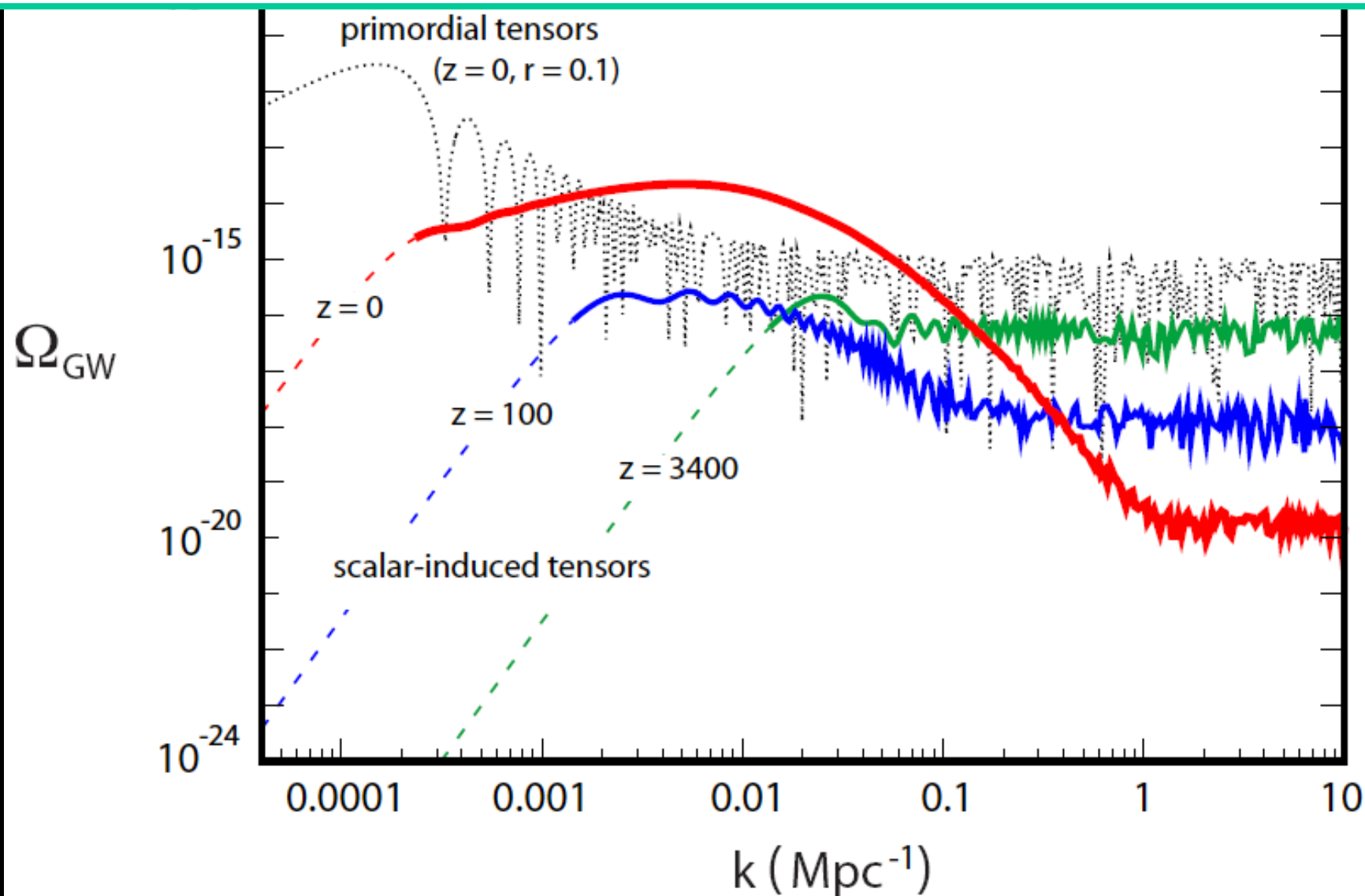
ゆらぎによる重力波生成のイメージ



4重極公式的な理解で（たぶん）OK。

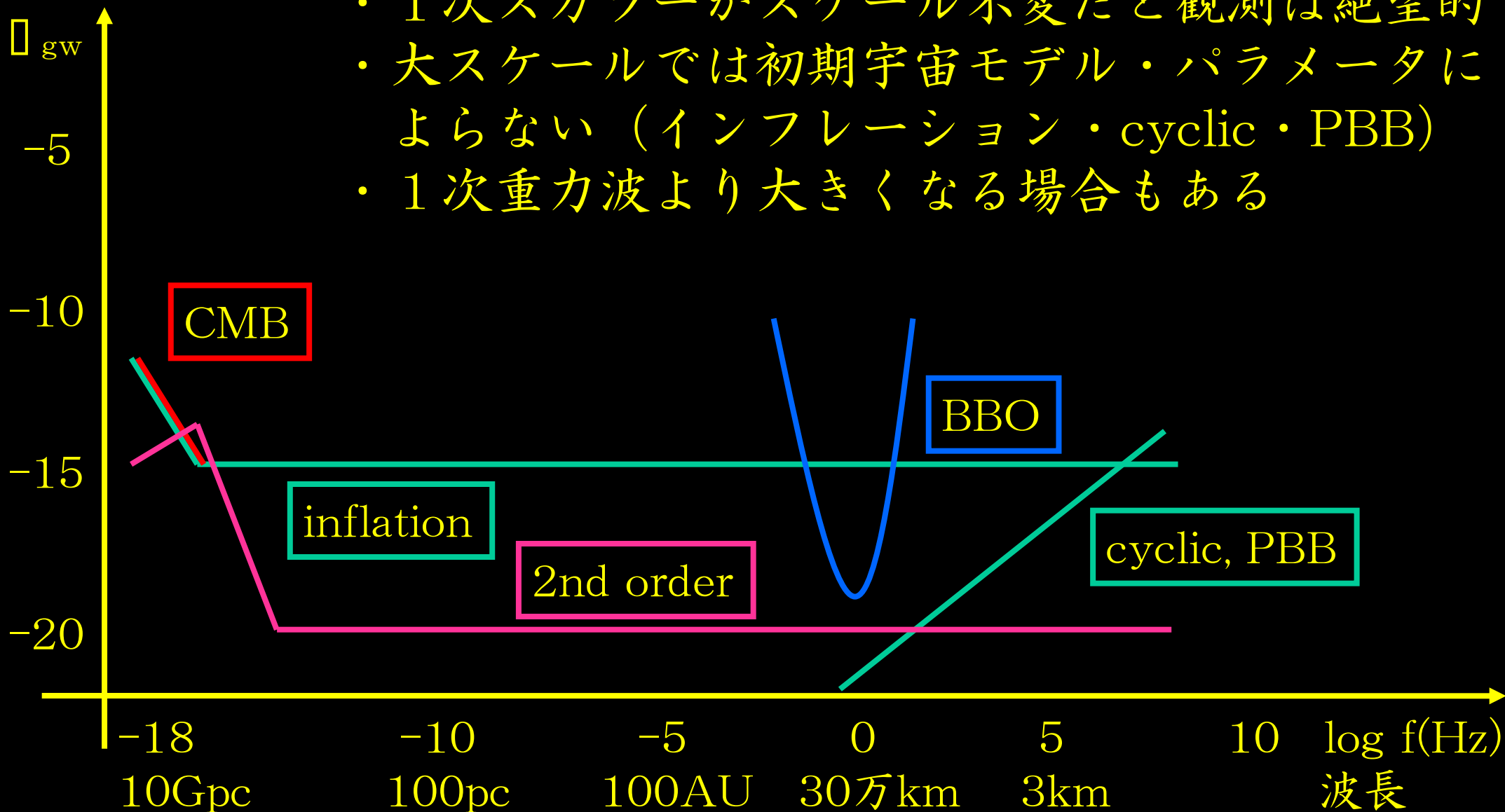
重力波の計算

$$\square h_{ij}^{(2)} = T_{ij}^{\text{grav}}(\Phi^{(1)}, \Psi^{(1)}) + T_{ij}^{\text{matter}}(\rho^{(1)}, P^{(1)}, v_i^{(1)}, \Pi_{ij}^{(1)})$$



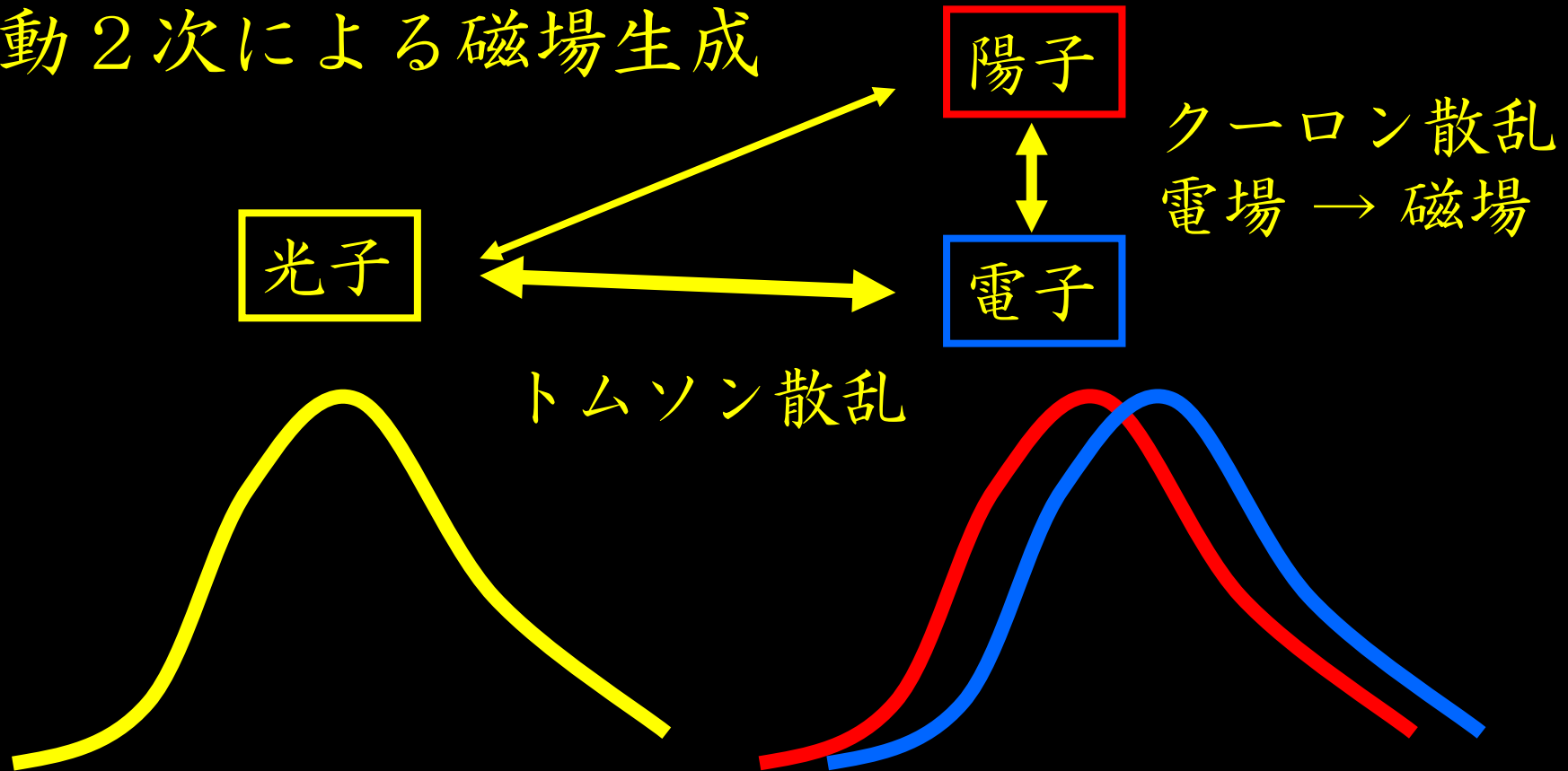
2次の重力波スペクトル

- ・ 1次スカラーがスケール不変だと観測は絶望的
- ・ 大スケールでは初期宇宙モデル・パラメータによらない (インフレーション・cyclic・PBB)
- ・ 1次重力波より大きくなる場合もある



磁場生成

摂動2次による磁場生成



トムソン散乱は主に電子を押す
→ 電場・電流生成 (回転成分: 2次)
→ 磁場生成 (KT et al., 05, 06, 07)

磁場の発展方程式

電子・陽子の運動方程式 + アンペールの法則
→ 磁場の発展方程式

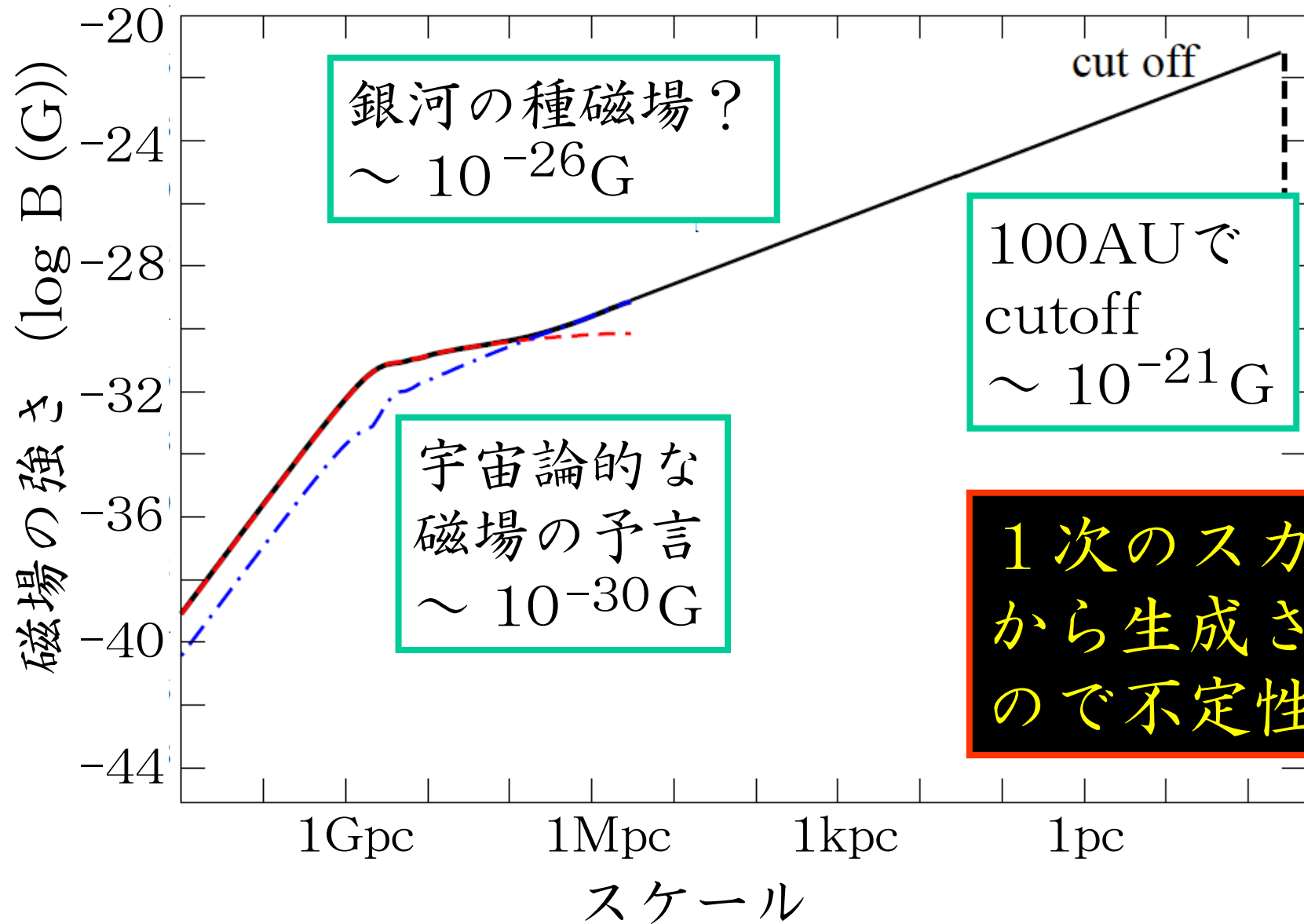
$$\begin{aligned} \dot{B}^i &\sim -2\epsilon^{ijk} C_{j,k} && \text{スリップ項} && \text{vorticityの差} \\ &\sim \frac{8\sigma_T}{3e} \rho_\gamma^{(0)} \epsilon^{ijk} \left[\frac{\rho_{\gamma,k}^{(1)}}{\rho_\gamma^{(0)}} \left(u_{ej}^{(1)} - u_{\gamma j}^{(1)} \right) + \left(u_{ej,k}^{(2)} - u_{\gamma j,k}^{(2)} \right) \right. \\ &\quad \left. + \frac{1}{8} \left(u_{el,k}^{(1)} \Pi_{\gamma j}^{(1)l} + u_{el}^{(1)} \Pi_{\gamma j,k}^{(1)l} \right) \right] \end{aligned}$$

光子の非等方ストレス

磁場は3つのソース項の時間積分
どれも1次では出てこない

磁場のスペクトル

Ichiki, KT et al., 2007



重力波・磁場のエネルギーの比較

$$\Omega_{\text{GW}} \sim 10^{-20}$$

$$\Omega_B \sim 3 \times 10^{-54} \left(\frac{B}{10^{-30} \text{ G}} \right)^2$$

同じ2次でも重力波と
磁場でだいぶ違う

振れ幅

$$h^{(2)} \sim \delta^2, \quad B^{(2)} \sim \frac{\sigma_T \rho_\gamma}{e} \epsilon^2 \delta^2$$

強結合パラメータ

$$\epsilon = H\tau_T \sim 2 \times 10^{-3} \left(\frac{1+z}{10^3} \right)^{-2}$$

磁場はだいぶsuppress

$$\rho_{\text{GW}}^{(2)} : \rho_B^{(2)} \sim \delta^4 T^4 : \alpha^2 \left(\frac{T}{m_e} \right)^4 \epsilon^4 \delta^4 T^4 \sim 1 : \alpha^2 \left(\frac{T}{m_e} \right)^4 \epsilon^4 \sim 1 : 10^{-39}$$

今日のお話

- 磁場は単に摂動2次というだけではできない
 - ・ 電場、電流
光子とバリオンがずれていないと
電子は押されない
 - ・ vorticity
 - 1 流体だと vorticity は保存
 - 要素間のずれが重要
- 磁場以外は？
 - ・ 磁場があれば電流が存在する？
 - ・ 電場、電荷密度はどう振る舞う？

宇宙論的摂動、強結合近似で（非相対論的に）
流体方程式とMaxwell方程式を全部解く

3、強結合近似

宇宙プラズマの成分

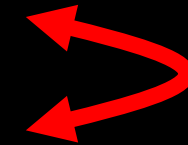
トムソン散乱

光子



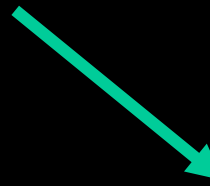
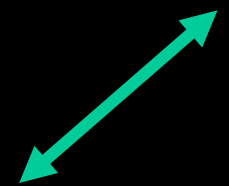
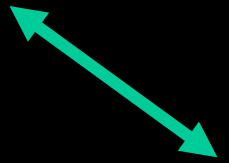
バリオン

{ 陽子
電子



クーロン散乱
電場・磁場

重力



CDM

ニュートリノ

2成分系のダイナミクス

運動方程式 (1 : 軽い、2 : 重い)

$$\partial_t \vec{v}_1 \approx -\frac{1}{\tau_{12}} (\vec{v}_1 - \vec{v}_2) + \dots$$

$$\partial_t \vec{v}_2 \approx -\frac{1}{\tau_{21}} (\vec{v}_2 - \vec{v}_1) + \dots$$

$$\tau_{12} = \frac{1}{\sigma n_2 v_1^{\text{th}}}, \quad \tau_{21} \approx \frac{m_2 n_2}{m_1 n_1} \tau_{12}$$

相対運動と重心運動に分離

$$\partial_t (\vec{v}_2 - \vec{v}_1) = -\left(\frac{1}{\tau_{12}} + \frac{1}{\tau_{21}} \right) (\vec{v}_2 - \vec{v}_1) \approx -\frac{1}{\tau_{12}} (\vec{v}_2 - \vec{v}_1)$$

$$\partial_t (\tau_{12} \vec{v}_1 + \tau_{21} \vec{v}_2) = 0$$

強結合近似

速度差を求めたい

$$\partial_t \delta \vec{v}_{12} = -\frac{1}{\tau} \delta \vec{v}_{12} + \vec{A}$$

散乱の時間スケールがダイナミクスのスケールよりずっと短いとき $H\tau \ll 1$

$$\delta \vec{v}_{12} = \delta \vec{v}_{12}^{(I)} + \delta \vec{v}_{12}^{(II)} + \dots$$

$$\vec{A} = \vec{A}^{(0)} + \vec{A}^{(I)} + \dots$$

と展開して

$$0 = -\frac{1}{\tau} \delta \vec{v}_{12}^{(I)} + \vec{A}^{(0)}$$

$$\partial_t \delta \vec{v}_{12}^{(I)} = -\frac{1}{\tau} \delta \vec{v}_{12}^{(II)} + \vec{A}^{(I)}$$

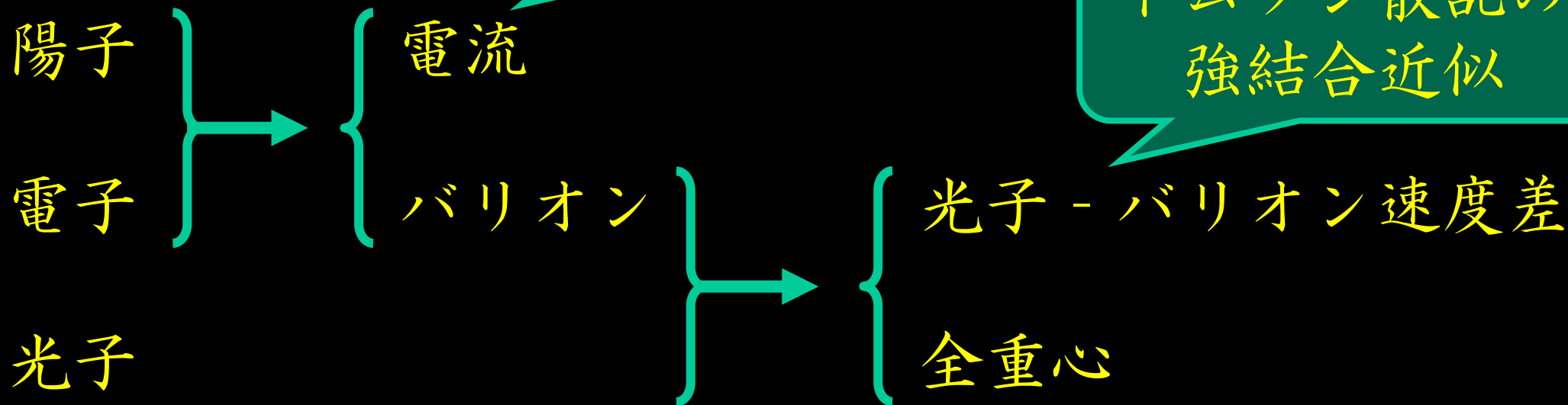
$$\left| \vec{v}_{12}^{(I)} \right| \sim H\tau$$

$$\left| \vec{v}_{12}^{(II)} \right| \sim (H\tau)^2$$

3 流体系

クーロン散乱の
強結合近似

トムソン散乱の
強結合近似



それぞれについて運動方程式が立てられる
どれを独立と思うかは自由

予想

いろいろな時間スケール

$$\tau_C = \frac{1}{\omega_p^2 \eta} = 4 \times 10^{-3} \text{ sec} \left(\frac{1+z}{10^5} \right)^{-\frac{3}{2}}$$

$$\tau_T = \frac{m_p}{\sigma_T \rho_\gamma} = 10^3 \text{ sec} \left(\frac{1+z}{10^5} \right)^{-4}$$

$$H^{-1} = 4.5 \times 10^9 \text{ sec} \left(\frac{1+z}{10^5} \right)^{-2}$$

3keV以下では
トムソンの方が短い

するとナイーブには

$$|\delta \vec{v}_{pe}| \sim \frac{\rho}{en_b} \sim H \tau_C \quad ??$$

$$|\delta \vec{v}_{\gamma b}| \sim \frac{n_b - C \rho_\gamma^{3/4}}{n_b} \sim H \tau_T$$

実は陽子・電子は
電場でも結合するので
そう単純ではない

今回の方針

ここでは

- ・トムソン強結合近似の2次まで
- ・クーロン強結合近似の1次まで
- ・宇宙論的摂動の2次まで

を解く (Kobayashi, Maartens, Shiromizu & KT, 07)。

ナイーブにはinconsistentだが、
解いてみると結果的にはconsistent。

	宇宙論的 1次	2次
強結合 1次	音波振動	
2次	シルク減衰	磁場生成

運動方程式

光子・陽子・電子の運動方程式

$$\begin{aligned} & \frac{4}{3}\rho_\gamma \left[\partial_t \vec{v}_\gamma + H\vec{v}_\gamma + \left(\vec{v}_\gamma \cdot \frac{\nabla}{a} \right) \vec{v}_\gamma \right] \quad \text{トムソン散乱} \\ & = -\frac{1}{3a} \nabla \rho_\gamma \left[-\frac{m_e^2}{m_p^2} \sigma_T n_p \rho_\gamma (\vec{v}_\gamma - \vec{v}_p) - \sigma_T n_e \rho_\gamma (\vec{v}_\gamma - \vec{v}_e) \right] - \frac{4\rho_\gamma}{3a} \nabla \Phi \\ \\ & m_p n_p \left[\partial_t \vec{v}_p + H\vec{v}_p + \left(\vec{v}_p \cdot \frac{\nabla}{a} \right) \vec{v}_p \right] \\ & = en_p (\vec{E} + \vec{v}_p \times \vec{B}) \left[-e^2 n_p n_e \eta (\vec{v}_p - \vec{v}_e) \right] + \frac{m_e^2}{m_p^2} \sigma_T n_p \rho_\gamma (\vec{v}_\gamma - \vec{v}_p) - \frac{m_p n_p}{a} \nabla \Phi \\ \\ & m_e n_e \left[\partial_t \vec{v}_e + H\vec{v}_e + \left(\vec{v}_e \cdot \frac{\nabla}{a} \right) \vec{v}_e \right] \quad \text{クーロン散乱} \quad \text{トムソン散乱} \\ & = -en_e (\vec{E} + \vec{v}_e \times \vec{B}) \left[+e^2 n_p n_e \eta (\vec{v}_p - \vec{v}_e) \right] + \sigma_T n_e \rho_\gamma (\vec{v}_\gamma - \vec{v}_e) - \frac{m_e n_e}{a} \nabla \Phi \end{aligned}$$

変数変換

重心・相対量を定義
陽子・電子

$$n_b \equiv \frac{m_p n_p + m_e n_e}{m_p + m_e}, \quad \delta n_{pe} \equiv n_p - n_e,$$
$$\vec{v}_b \equiv \frac{m_p n_p \vec{v}_p + m_e n_e \vec{v}_e}{m_p n_p + m_e n_e}, \quad \delta \vec{v}_{pe} \equiv \vec{v}_p - \vec{v}_e,$$

光子・バリオン

$$\vec{v} \equiv \frac{(4\rho_\gamma/3)\vec{v}_\gamma + (m_p + m_e)n_b\vec{v}_b}{(4\rho_\gamma/3) + (m_p + m_e)n_b}, \quad \delta \vec{v}_{\gamma b} \equiv \vec{v}_\gamma - \vec{v}_b,$$

宇宙論的摂動

宇宙論的摂動の2次まで考える

$$\rho_\gamma(t, \vec{x}) = \rho_\gamma^{(0)}(t) + \rho_\gamma^{(1)}(t, \vec{x}) + \rho_\gamma^{(2)}(t, \vec{x}) + \dots,$$

$$n_b(t, \vec{x}) = n_b^{(0)}(t) + n_b^{(1)}(t, \vec{x}) + n_b^{(2)}(t, \vec{x}) + \dots,$$

$$\vec{V}(t, \vec{x}) = \vec{V}^{(1)}(t, \vec{x}) + \vec{V}^{(2)}(t, \vec{x}) + \dots, \quad \nabla \times \vec{V}^{(1)} = 0$$

$$\vec{B}(t, \vec{x}) = \vec{B}^{(2)}(t, \vec{x}) + \dots,$$

→ 運動方程式からローレンツ項、
ホール項などが消える

運動方程式の書き直し

pe速度差、光子速度、 γ b速度差の方程式

$$\frac{m_e}{e(1+\beta)} \left[\partial_t \delta \vec{v}_{pe} + H \delta \vec{v}_{pe} + \left(\vec{v}_b \cdot \frac{\nabla}{a} \right) \delta \vec{v}_{pe} + \left(\delta \vec{v}_{pe} \cdot \frac{\nabla}{a} \right) \vec{v}_b \right]$$

$$= \vec{E} - \left[en_b \eta + \frac{1+\beta^4}{(1+\beta)^2} \frac{\sigma_T \rho_\gamma}{e} \right] \delta \vec{v}_{pe} - \frac{1-\beta^3}{1+\beta} \frac{\sigma_T \rho_\gamma}{e} \delta \vec{v}_{\gamma b}$$

$$\partial_t \vec{v}_\gamma + H \vec{v}_\gamma + \left(\vec{v}_\gamma \cdot \frac{\nabla}{a} \right) \vec{v}_\gamma$$

$$= -\frac{1}{4a} \frac{\nabla \rho_\gamma}{\rho_\gamma} - \frac{3}{4} \sigma_T n_b \left[(1+\beta^2) \delta \vec{v}_{\gamma b} + \frac{1-\beta^3}{1+\beta} \delta \vec{v}_{pe} \right] - \frac{1}{a} \nabla \Phi$$

$$\partial_t \delta \vec{v}_{\gamma b} + H \delta \vec{v}_{\gamma b} + \left(\vec{v} \cdot \frac{\nabla}{a} \right) \delta \vec{v}_{\gamma b} + \left(\delta \vec{v}_{\gamma b} \cdot \frac{\nabla}{a} \right) \vec{v} - \frac{1-R}{1+R} \left(\delta \vec{v}_{\gamma b} \cdot \frac{\nabla}{a} \right) \delta \vec{v}_{\gamma b}$$

$$= -\frac{1}{4a} \frac{\nabla \rho_\gamma}{\rho_\gamma} - \frac{1+R}{1+\beta} \frac{\sigma_T \rho_\gamma}{m_p} \left[(1+\beta^2) \delta \vec{v}_{\gamma b} + \frac{1-\beta^3}{1+\beta} \delta \vec{v}_{pe} \right]$$

普通は

普通は光子・バリオンの2流体で考える

$$\frac{m_e}{e(1+\beta)} \left[\partial_t \delta \vec{v}_{pe} + H \delta \vec{v}_{pe} + \left(\vec{v}_b \cdot \frac{\nabla}{a} \right) \delta \vec{v}_{pe} + \left(\delta \vec{v}_{pe} \cdot \frac{\nabla}{a} \right) \vec{v}_b \right]$$
$$= \vec{E} - \left[en_b \eta + \frac{1+\beta^4}{(1+\beta)^2} \frac{\sigma_T \rho_\gamma}{e} \right] \delta \vec{v}_{pe} - \frac{1-\beta^3}{1+\beta} \frac{\sigma_T \rho_\gamma}{e} \delta \vec{v}_{\gamma b}$$

$$\partial_t \vec{v}_\gamma + H \vec{v}_\gamma + \left(\vec{v}_\gamma \cdot \frac{\nabla}{a} \right) \vec{v}_\gamma$$

$$= -\frac{1}{4a} \frac{\nabla \rho_\gamma}{\rho_\gamma} - \frac{3}{4} \sigma_T n_b \left[(1+\beta^2) \delta \vec{v}_{\gamma b} + \frac{1-\beta^3}{1+\beta} \delta \vec{v}_{pe} \right] - \frac{1}{a} \nabla \Phi$$

$$\partial_t \delta \vec{v}_{\gamma b} + H \delta \vec{v}_{\gamma b} + \left(\vec{v} \cdot \frac{\nabla}{a} \right) \delta \vec{v}_{\gamma b} + \left(\delta \vec{v}_{\gamma b} \cdot \frac{\nabla}{a} \right) \vec{v} - \frac{1-R}{1+R} \left(\delta \vec{v}_{\gamma b} \cdot \frac{\nabla}{a} \right) \delta \vec{v}_{\gamma b}$$

$$= -\frac{1}{4a} \frac{\nabla \rho_\gamma}{\rho_\gamma} - \frac{1+R}{1+\beta} \frac{\sigma_T \rho_\gamma}{m_p} \left[(1+\beta^2) \delta \vec{v}_{\gamma b} + \frac{1-\beta^3}{1+\beta} \delta \vec{v}_{pe} \right]$$

まとめ

基礎方程式

- ・光子の運動方程式
- ・光子 - バリオンの相対運動の方程式
- ・電流の運動方程式 → オームの法則
- ・マックスウェル方程式

解き方

- ・宇宙論的摂動の2次まで
- ・トムソン強結合近似の2次まで
- ・クーロン強結合近似の1次まで

4、Maxwell + Ohmを解く

Maxwell + Ohmを解く

- ・ 宇宙論的摂動の2次まで
- ・ クーロン強結合近似の1次まで
- ・ トムソン項は外力と見なす
 - 電荷密度・電流・電場・磁場が
トムソン項の関数として表される

基礎方程式

$$\frac{1}{a} \nabla \cdot \vec{E} = e \delta n_{pe}$$

$$\partial_t \vec{E} + 2H \vec{E} = \frac{1}{a} \nabla \times \vec{B} - e(n_b \delta \vec{v}_{pe} + \delta n_{pe} \vec{v}_b),$$

$$\partial_t \vec{B} + 2H \vec{B} = -\frac{1}{a} \nabla \times \vec{E}$$

$$\partial_t \delta n_{pe} + 3H \delta n_{pe} + \frac{1}{a} \nabla \cdot (n_b \delta \vec{v}_{pe} + \delta n_{pe} \vec{v}_b) = 0$$

$$\vec{E} = \frac{m_e}{e(1+\beta)} \left[\partial_t \delta \vec{v}_{pe} + \left(\vec{v}_b \cdot \frac{\nabla}{a} \right) \delta \vec{v}_{pe} + \left(\delta \vec{v}_{pe} \cdot \frac{\nabla}{a} \right) \vec{v}_b \right] + e n_b \eta_{\text{eff}} \delta \vec{v}_{pe} + \vec{C}$$

電流の運動方程式



オームの法則

トムソン項 有効抵抗

$$\vec{C} \equiv \frac{1 - \beta^3}{1 + \beta} \frac{\sigma_T \rho_\gamma}{e} \delta \vec{v}_{\gamma b}$$

$$\begin{aligned} \eta_{\text{eff}} &\equiv \eta + \frac{1 + \beta^4}{(1 + \beta)^2} \frac{\sigma_T \rho_\gamma}{e^2 n_b} + \frac{m_e}{(1 + \beta) e^2 n_b} H \\ &= \eta \left[1 + \frac{1 + \beta^4}{(1 + \beta)^2} \frac{\tau_C}{\tau_T} + \frac{1}{1 + \beta} H \tau_C \right], \end{aligned}$$

1次摂動

1次摂動では磁場なし

$$\frac{1}{a} \nabla \cdot \vec{E}^{(1)} = e \delta n_{pe}^{(1)},$$

$$\partial_t \vec{E}^{(1)} + 2H \vec{E}^{(1)} = -e n_b^{(0)} \delta \vec{v}_{pe}^{(1)},$$

$$\partial_t \delta n_{pe}^{(1)} + 3H \delta n_{pe}^{(1)} + \frac{n_b^{(0)}}{a} \nabla \cdot \delta \vec{v}_{pe}^{(1)} = 0,$$

$$\vec{E}^{(1)} = \frac{m_e}{e(1 + \beta)} \partial_t \delta \vec{v}_{pe}^{(1)} + e n_b^{(0)} \eta_{\text{eff}}^{(0)} \delta \vec{v}_{pe}^{(1)} + \vec{C}^{(1)}.$$

オームの法則

$$\vec{E}^{(1)} = \frac{m_e}{e(1+\beta)} \partial_t \delta \vec{v}_{pe}^{(1)} + en_b^{(0)} \eta_{\text{eff}}^{(0)} \delta \vec{v}_{pe}^{(1)} + \vec{C}^{(1)}$$

電流に対するクーロン強結合近似

$$\frac{|m_e \partial_t \delta \vec{v}_{pe}^{(1)} / e(1+\beta)|}{|en_b^{(0)} \eta_{\text{eff}}^{(0)} \delta \vec{v}_{pe}^{(1)}|} \sim \frac{k}{a} \tau_C \sim 9.3 \times 10^{-13} \left(\frac{k}{aH} \right) \left(\frac{1+z}{10^5} \right)^{1/2} \ll 1$$

$$\vec{E}^{(1)} = en_b^{(0)} \eta_{\text{eff}}^{(0)} \delta \vec{v}_{pe}^{(1)} + \vec{C}^{(1)}$$

宇宙論的摂動

オームの法則の発散を取る

$$\vec{E}^{(1)} = en_b^{(0)} \eta_{\text{eff}}^{(0)} \delta \vec{v}_{pe}^{(1)} + \vec{C}^{(1)}$$

$$\eta_{\text{eff}}^{(0)} \left[\partial_t \delta n_{pe}^{(1)} + 3H \delta n_{pe}^{(1)} \right] + \delta n_{pe}^{(1)} = \frac{1}{ea} \nabla \cdot \vec{C}^{(1)}$$

電荷に対する強結合近似 (??)

$$\frac{\left| \eta_{\text{eff}}^{(0)} \left[\partial_t \delta n_{pe}^{(1)} + 3H \delta n_{pe}^{(1)} \right] \right|}{\left| \delta n_{pe}^{(1)} \right|} \sim \frac{k}{a} \eta_{\text{eff}}^{(0)} \sim 2.1 \times 10^{-25} \left(\frac{k}{aH} \right) \left(\frac{1+z}{10^5} \right)^{1/2} \ll 1$$

$$\delta n_{pe}^{(1)} \approx \frac{1}{ea} \nabla \cdot \vec{C}^{(1)}$$

速度差と電場

電荷保存の式から速度差が求まる。

$$\partial_t \delta n_{pe}^{(1)} + 3H \delta n_{pe}^{(1)} + \frac{n_b^{(0)}}{a} \nabla \cdot \delta \vec{v}_{pe}^{(1)} = 0$$

$$\delta \vec{v}_{pe}^{(1)} = -\frac{1}{en_b} (\partial_t + 2H) \vec{C}^{(1)} + \frac{1}{a} \nabla \times \vec{D}^{(1)}$$

オームの法則から電場が求まる

$$\vec{E}^{(1)} = en_b^{(0)} \eta_{\text{eff}}^{(0)} \delta \vec{v}_{pe}^{(1)} + \vec{C}^{(1)}$$

$$\vec{E}^{(1)} = \vec{C}^{(1)} + \frac{en_b^{(0)} \eta^{(0)}}{a} \nabla \times \vec{D}^{(1)}$$

積分定数を決める

電磁誘導の法則から積分定数が決まる

$$\partial_t \vec{E}^{(1)} + 2H \vec{E}^{(1)} = -en_b^{(0)} \delta \vec{v}_{pe}^{(1)}$$

$$\left[\eta_{\text{eff}}^{(0)} \partial_t + \eta_{\text{eff}}^{(0)} \left(2H + \frac{\partial_t n_b^{(0)}}{n_b^{(0)}} + \frac{\partial_t \eta_{\text{eff}}^{(0)}}{\eta_{\text{eff}}^{(0)}} \right) + 1 \right] \frac{1}{a} \nabla \times \vec{D}^{(1)} = 0$$

superhorizon (initial) でゼロだとするとゼロ

$$\nabla \times \vec{D}^{(1)} = 0$$

1 次 の 解

1 次 の 解 を ま と め る と

$$\delta n_{pe}^{(1)} = \frac{1}{ea} \nabla \cdot \vec{C}^{(1)}$$

$$\delta \vec{v}_{pe}^{(1)} = -\frac{1}{en_b^{(0)}} (\partial_t + 2H) \vec{C}^{(1)}$$

$$\vec{E}^{(1)} = \vec{C}^{(1)},$$

$$\rho^{(1)} = \frac{1}{a} \nabla \cdot \vec{C}^{(1)}$$

$$\vec{j}^{(1)} = -(\partial_t + 2H) \vec{C}^{(1)}$$

電荷密度・電流
電場がトムソン項で
表された

近似の意味

一般化オームの法則の発散をそのまま取る

$$\frac{1}{\omega_p^2} \partial_t^2 \rho^{(1)} + \eta_{\text{eff}}^{(0)} \partial_t \rho^{(1)} + \rho^{(1)} = \frac{1}{a} \nabla \cdot \vec{C}^{(1)}$$

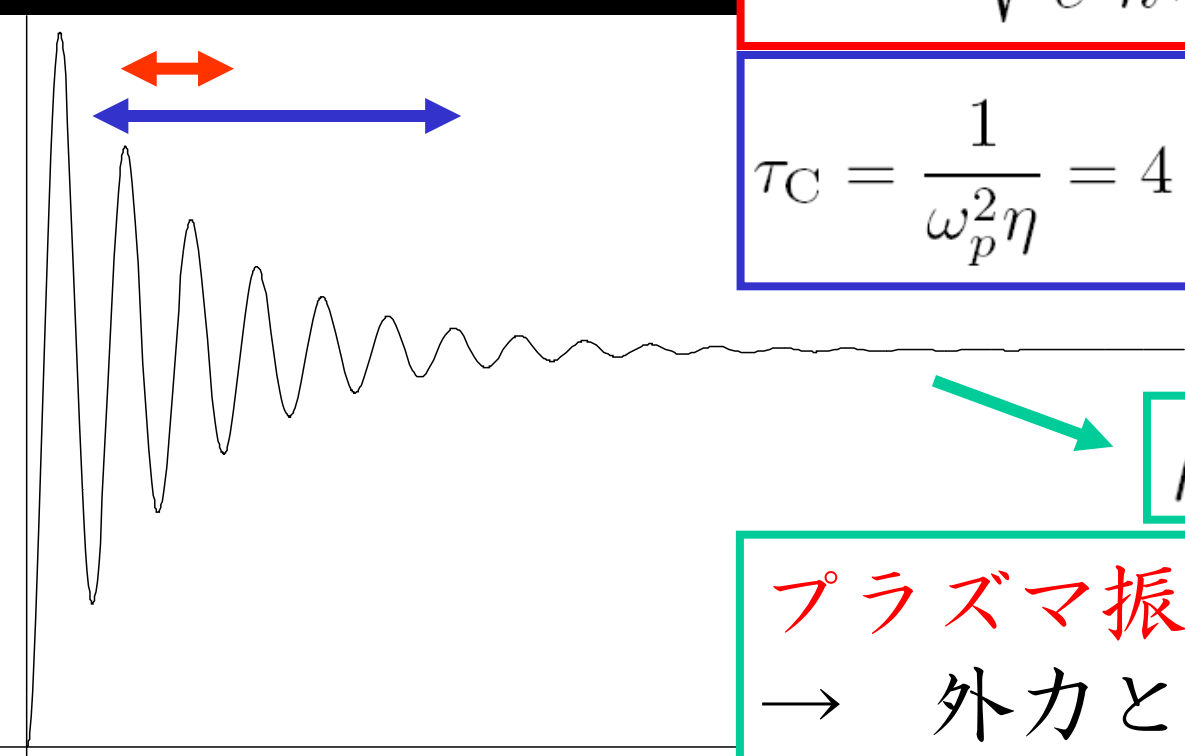
外力のある
減衰振動

$$\omega_p^{-1} \equiv \sqrt{\frac{m_e}{e^2 n^{(0)}}} = 2 \times 10^{-9} \text{ sec} \left(\frac{1+z}{10^5} \right)^{-3/2}$$

$$\tau_C = \frac{1}{\omega_p^2 \eta} = 4 \times 10^{-3} \text{ sec} \left(\frac{1+z}{10^5} \right)^{-3/2}$$

$$\rho^{(1)} = \nabla \cdot \vec{C}^{(1)}$$

プラズマ振動と電気抵抗による緩和
→ 外力との平衡に落ち着く



2次摂動

2次から磁場が登場

$$\partial_t \vec{E}^{(2)} + 2H \vec{E}^{(2)} = \frac{1}{a} \nabla \times \vec{B}^{(2)} - e \left(n_b^{(0)} \delta \vec{v}_{pe}^{(2)} + n_b^{(1)} \delta \vec{v}_{pe}^{(1)} + \delta n_{pe}^{(1)} \vec{v}_b^{(1)} \right)$$

$$\partial_t \vec{B}^{(2)} + 2H \vec{B}^{(2)} = -\frac{1}{a} \nabla \times \vec{E}^{(2)},$$

$$\partial_t \delta n_{pe}^{(2)} + 3H \delta n_{pe}^{(2)} + \frac{1}{a} \nabla \cdot \left(n_b^{(0)} \delta \vec{v}_{pe}^{(2)} + n_b^{(1)} \delta \vec{v}_{pe}^{(1)} + \delta n_{pe}^{(1)} \vec{v}_b^{(1)} \right) = 0,$$

$$\begin{aligned} \vec{E}^{(2)} = & \frac{m_e}{e(1+\beta)} \left[\partial_t \delta \vec{v}_{pe}^{(2)} + \left(\vec{v}_b^{(1)} \cdot \frac{\nabla}{a} \right) \delta \vec{v}_{pe}^{(1)} + \left(\delta \vec{v}_{pe}^{(1)} \cdot \frac{\nabla}{a} \right) \vec{v}_b^{(1)} \right] \\ & + e n_b^{(0)} \eta_{\text{eff}}^{(0)} \left(\delta \vec{v}_{pe}^{(2)} + \frac{n_b^{(1)}}{n_b^{(0)}} \delta \vec{v}_{pe}^{(1)} + \frac{\eta_{\text{eff}}^{(1)}}{\eta_{\text{eff}}^{(0)}} \delta \vec{v}_{pe}^{(1)} \right) + \vec{C}^{(2)}. \end{aligned}$$

$H \tau_c, H \eta \ll 1$ を使いながら同じように解く

解のまとめ

1次と2次を合わせた解

$$\vec{E} = \vec{C},$$

$$\vec{B} = -\frac{1}{a^2} \int dt a \nabla \times \vec{C},$$

$$\rho = \frac{1}{a} \nabla \cdot \vec{C},$$

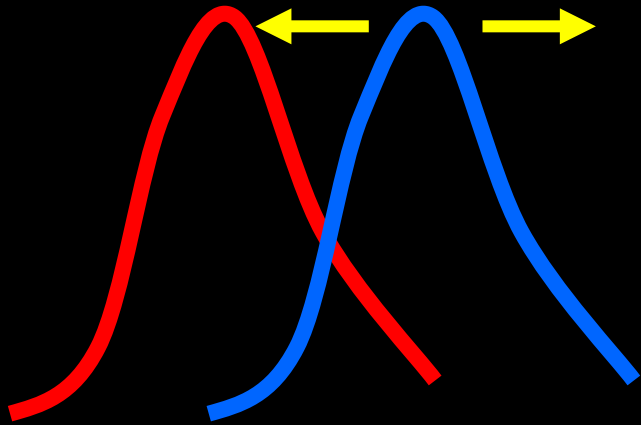
$$\vec{j} = -(\partial_t + 2H)\vec{C} - \frac{1}{a^3} \int dt a \nabla \times \nabla \times \vec{C}$$

1次ではゼロ

全ての量がトムソン項で表された

コメント

電場 光子圧



陽子

電子

$$\vec{E} = \vec{C},$$

$$\vec{B} = -\frac{1}{a^2} \int dt a \nabla \times \vec{C},$$

$$\rho = \frac{1}{a} \nabla \cdot \vec{C},$$

$$\vec{j} = -(\partial_t + 2H)\vec{C} - \frac{1}{a^3} \int dt a \nabla \times \nabla \times \vec{C}$$

- ・ オームの法則で電流項は効かない
→ 電子が光子に押されるのと電場がつりあう
- ・ 電流 → 変位電流を支える部分 + 磁場を支える部分
- ・ 電場、電荷密度はトムソン項がなくなると消える
磁場、電流はトムソン項がなくなっても残る

まとめ

Maxwell + Ohmを解く

- ・ 宇宙論的摂動の2次まで
- ・ クーロン強結合近似の1次まで
- ・ トムソン項は外力と見なす
 - 電荷密度・電流・電場・磁場が
トムソン項の関数として表される

次の章でトムソン項について解き、
全てが基本的な量で表される

5、トムソン項を解く

磁場生成とトムソン項

磁場とトムソン項の関係

$$\vec{B} = -\frac{1}{a^2} \int dt a \nabla \times \vec{C}$$

$$\vec{C} \equiv \frac{1 - \beta^3}{1 + \beta} \frac{\sigma_T \rho_\gamma}{e} \delta \vec{v}_{\gamma b}$$

$$\nabla \times \vec{C}^{(2)} = \frac{1 - \beta^3}{1 + \beta} \frac{\sigma_T \rho_\gamma^{(0)}}{e} \left[\frac{\nabla \rho_\gamma^{(1)}}{\rho_\gamma^{(0)}} \times \delta \vec{v}_{\gamma b}^{(1)} + \nabla \times \delta \vec{v}_{\gamma b}^{(2)} \right]$$

光子の密度勾配と vorticity の差
速度差の外積

トムソン散乱の強結合近似はこれまでもあったが、こんなものを考えたことはない

運動方程式

光子 - バリオンの速度差の運動方程式

$$\begin{aligned} & \partial_t \delta \vec{v}_{\gamma b} + H \delta \vec{v}_{\gamma b} + \left(\vec{v} \cdot \frac{\nabla}{a} \right) \delta \vec{v}_{\gamma b} + \left(\delta \vec{v}_{\gamma b} \cdot \frac{\nabla}{a} \right) \vec{v} - \frac{1-R}{1+R} \left(\delta \vec{v}_{\gamma b} \cdot \frac{\nabla}{a} \right) \delta \vec{v}_{\gamma b} \\ &= -\frac{1}{4a} \frac{\nabla \rho_\gamma}{\rho_\gamma} - \frac{1+R}{1+\beta} \frac{\sigma_T \rho_\gamma}{m_p} \left[(1+\beta^2) \delta \vec{v}_{\gamma b} + \frac{1-\beta^3}{1+\beta} \delta \vec{v}_{pe} \right]. \end{aligned}$$

電流による寄与

前節の解析より

$$\frac{|\delta \vec{v}_{pe}|}{|\delta \vec{v}_{\gamma b}|} \sim \frac{\sigma_T \rho_\gamma k}{e^2 a n_b} = \frac{k}{a \omega_p^2 \tau_T} \sim 1.5 \times 10^{-27} \left(\frac{k}{aH} \right) \left(\frac{1+z}{10^5} \right)^3$$

したがって電流による寄与は無視してよい
→ 通常のCMB現象論の正当性が示された

トムソン散乱の強結合近似

したがって運動方程式は

$$\begin{aligned} \partial_t \delta \vec{v}_{\gamma b} + H \delta \vec{v}_{\gamma b} + \left(\vec{v} \cdot \frac{\nabla}{a} \right) \delta \vec{v}_{\gamma b} + \left(\delta \vec{v}_{\gamma b} \cdot \frac{\nabla}{a} \right) \vec{v} \\ = - \frac{1}{4a} \frac{\nabla \rho_\gamma}{\rho_\gamma} - \frac{1 + \beta^2}{1 + \beta} (1 + R) \frac{\sigma_T \rho_\gamma}{m_p} \delta \vec{v}_{\gamma b}. \end{aligned}$$

これを強結合近似で解く

$$\frac{m_p}{\sigma_T \rho_\gamma} \frac{k}{a} = 2.4 \times 10^{-6} \left(\frac{k}{aH} \right) \left(\frac{1+z}{10^5} \right)^{-2}$$

密度もずれを考慮

$$n_b = \bar{n}_b (1 + \Delta)$$

密度差・速度差を強結合パラメータで展開

$$\Delta = \Delta^{(I)} + \Delta^{(II)} + \dots, \quad \delta \vec{v}_{\gamma b} = \delta \vec{v}_{\gamma b}^{(I)} + \delta \vec{v}_{\gamma b}^{(II)} + \dots$$

連続の式

光子・バリオンの連続の式

$$\begin{aligned}\partial_t \rho_\gamma + 4H \rho_\gamma + \left(\vec{v}_\gamma \cdot \frac{\nabla}{a} \right) \rho_\gamma + \frac{4\rho_\gamma}{3a} \nabla \cdot \vec{v}_\gamma &= 0, \\ \partial_t n_b + 3H n_b + \left(\vec{v}_b \cdot \frac{\nabla}{a} \right) n_b + \frac{n_b}{a} \nabla \cdot \vec{v}_b &= 0.\end{aligned}$$

0次と1次の式

$$\left(\partial_t + \vec{v} \cdot \frac{\nabla}{a} \right) \left(\frac{\bar{n}_b}{\rho_\gamma^{3/4}} \right) = 0 \quad \rightarrow \quad 0 \text{次ではadiabatic}$$

$$\partial_t \Delta^{(I)} + \left(\vec{v} \cdot \frac{\nabla}{a} \right) \Delta^{(I)} - \frac{1}{a} \nabla \cdot \left(\frac{1}{1 + \bar{R}} \delta \vec{v}_{\gamma b}^{(I)} \right) - \frac{1}{1 + \bar{R}} \frac{(\delta \vec{v}_{\gamma b}^{(I)} \cdot \nabla) \bar{n}_b}{a \bar{n}_b} = 0$$



$$\Delta^{(I,1)} = \int dt \frac{1}{1 + \bar{R}^{(0)}} \frac{1}{a} \nabla \cdot \delta \vec{v}_{\gamma b}^{(I,1)}$$

欲しいのは1次だけ
(後でわかる)

強結合 1 次

$$\begin{aligned} & \partial_t \delta \vec{v}_{\gamma b} + H \delta \vec{v}_{\gamma b} + \left(\vec{v} \cdot \frac{\nabla}{a} \right) \delta \vec{v}_{\gamma b} + \left(\delta \vec{v}_{\gamma b} \cdot \frac{\nabla}{a} \right) \vec{v} \\ &= -\frac{1}{4a} \frac{\nabla \rho_\gamma}{\rho_\gamma} - \frac{1 + \beta^2}{1 + \beta} (1 + \bar{R} + \bar{R} \Delta) \frac{\sigma_T \rho_\gamma}{m_p} \delta \vec{v}_{\gamma b}. \end{aligned}$$

↓
強結合 1 次

$$0 = -\frac{1}{4a} \frac{\nabla \rho_\gamma}{\rho_\gamma} - \frac{1 + \beta^2}{1 + \beta} (1 + \bar{R}) \frac{\sigma_T \rho_\gamma}{m_p} \delta \vec{v}_{\gamma b}^{(I)}$$

これを宇宙論的摂動の 1 次・2 次で解く

強結合1次の解

宇宙論的摂動1次と2次の解

$$\delta \vec{v}_{\gamma b}^{(I,1)} = -\frac{1}{4a} \frac{1+\beta}{1+\beta^2} \frac{1}{1+\bar{R}^{(0)}} \frac{m_p}{\sigma_T \rho_\gamma^{(0)}} \frac{\nabla \rho_\gamma^{(1)}}{\rho_\gamma^{(0)}}$$

$$\delta \vec{v}_{\gamma b}^{(I,2)} = -\frac{1}{4a} \frac{1+\beta}{1+\beta^2} \frac{1}{1+\bar{R}^{(0)}} \frac{m_p}{\sigma_T \rho_\gamma^{(0)}} \left[\frac{\nabla \rho_\gamma^{(2)}}{\rho_\gamma^{(0)}} - \frac{8+7\bar{R}^{(0)}}{4(1+\bar{R}^{(0)})} \frac{\rho_\gamma^{(1)}}{\rho_\gamma^{(0)}} \frac{\nabla \rho_\gamma^{(1)}}{\rho_\gamma^{(0)}} \right]$$

ところが磁場生成に関わる項

$$\nabla \times \vec{C}^{(2)} = \frac{1-\beta^3}{1+\beta} \frac{\sigma_T \rho_\gamma^{(0)}}{e} \left[\frac{\nabla \rho_\gamma^{(1)}}{\rho_\gamma^{(0)}} \times \delta \vec{v}_{\gamma b}^{(1)} + \nabla \times \delta \vec{v}_{\gamma b}^{(2)} \right]$$

はゼロになる。→ 強結合2次を解く

(電荷密度・電流・電場のleadingはこれで十分)

強結合2次

$$\begin{aligned} & \partial_t \delta \vec{v}_{\gamma b}^{(I)} + H \delta \vec{v}_{\gamma b}^{(I)} + \left(\vec{v} \cdot \frac{\nabla}{a} \right) \delta \vec{v}_{\gamma b}^{(I)} + \left(\delta \vec{v}_{\gamma b}^{(I)} \cdot \frac{\nabla}{a} \right) \vec{v} \\ &= -\frac{1 + \beta^2}{1 + \beta} \frac{\sigma_T \rho_\gamma}{m_p} \left[\bar{R} \Delta^{(I)} \delta \vec{v}_{\gamma b}^{(I)} + (1 + \bar{R}) \delta \vec{v}_{\gamma b}^{(II)} \right]. \end{aligned}$$

$$\delta \vec{v}_{\gamma b}^{(II,1)} = -\frac{1}{4a} \left[\frac{1 + \beta}{1 + \beta^2} \frac{1}{1 + \bar{R}^{(0)}} \frac{m_p}{\sigma_T \rho_\gamma^{(0)}} \right]^2 \left[\frac{\partial_t \nabla \rho_\gamma^{(1)}}{\rho_\gamma^{(0)}} - \frac{8 + 7\bar{R}^{(0)}}{1 + \bar{R}^{(0)}} H \frac{\nabla \rho_\gamma^{(1)}}{\rho_\gamma^{(0)}} \right]$$

$$\begin{aligned} \delta \vec{v}_{\gamma b}^{(II,2)} &= -\frac{1}{4a} \left[\frac{1 + \beta}{1 + \beta^2} \frac{1}{1 + \bar{R}^{(0)}} \frac{m_p}{\sigma_T \rho_\gamma^{(0)}} \right]^2 \\ &\times \left[\frac{\partial_t \nabla \rho_\gamma^{(2)}}{\rho_\gamma^{(0)}} - \frac{4(2 + \bar{R}^{(0)})}{1 + \bar{R}^{(0)}} H \frac{\nabla \rho_\gamma^{(2)}}{\rho_\gamma^{(0)}} + \frac{8 + 7\bar{R}^{(0)}}{4(1 + \bar{R}^{(0)})} \frac{\partial_t \rho_\gamma^{(1)}}{\rho_\gamma^{(0)}} \frac{\nabla \rho_\gamma^{(1)}}{\rho_\gamma^{(0)}} - \frac{12 + 11\bar{R}^{(0)}}{4(1 + \bar{R}^{(0)})} \frac{\rho_\gamma^{(1)}}{\rho_\gamma^{(0)}} \frac{\partial_t \nabla \rho_\gamma^{(1)}}{\rho_\gamma^{(0)}} \right. \\ &\quad \left. + \frac{3(164 + 217\bar{R}^{(0)} + 69\bar{R}^{(0)2})}{(1 + \bar{R}^{(0)})^2} H \frac{\rho_\gamma^{(1)}}{\rho_\gamma^{(0)}} \frac{\nabla \rho_\gamma^{(1)}}{\rho_\gamma^{(0)}} + \frac{(\vec{v}^{(1)} \cdot \nabla) \nabla \rho_\gamma^{(1)} + (\nabla \rho_\gamma^{(1)} \cdot \nabla) \vec{v}^{(1)}}{a \rho_\gamma^{(0)}} \right] \\ &+ \frac{1}{4a} \frac{1 + \beta}{1 + \beta^2} \frac{\bar{R}^{(0)}}{(1 + \bar{R}^{(0)})^2} \frac{m_p}{\sigma_T \rho_\gamma^{(0)}} \Delta^{(I,1)} \frac{\nabla \rho_\gamma^{(1)}}{\rho_\gamma^{(0)}}. \end{aligned}$$

密度勾配と平行でない

電磁氣的量に代入

$$\rho^{(1)} = -\frac{1}{4a^2} \frac{1 - \beta^3}{1 + \beta^2} \frac{1}{1 + \bar{R}^{(0)}} \frac{m_p}{e} \frac{\nabla^2 \rho_\gamma^{(1)}}{\rho_\gamma^{(0)}},$$

$$\vec{j}^{(1)} = \frac{1}{4a} \frac{1 - \beta^3}{1 + \beta^2} \frac{1}{1 + \bar{R}^{(0)}} \frac{m_p}{e} \left[\frac{\partial_t \nabla \rho_\gamma^{(1)}}{\rho_\gamma^{(0)}} + \frac{5 + 4\bar{R}^{(0)}}{1 + \bar{R}^{(0)}} H \frac{\nabla \rho_\gamma^{(1)}}{\rho_\gamma^{(0)}} \right],$$

$$\vec{E}^{(1)} = -\frac{1}{4a} \frac{1 - \beta^3}{1 + \beta^2} \frac{1}{1 + \bar{R}^{(0)}} \frac{m_p}{e} \frac{\nabla \rho_\gamma^{(1)}}{\rho_\gamma^{(0)}},$$

$$\vec{B}^{(2)} = -\frac{1}{16a^2} \frac{(1 + \beta)(1 - \beta^3)}{(1 + \beta^2)^2} \frac{m_p^2}{e\sigma_T}$$

$$\times \int dt \frac{1}{(1 + \bar{R}^{(0)})^2} \frac{\nabla \rho_\gamma^{(1)}}{\rho_\gamma^{(0)}}$$

$$\times \left[-\frac{2(8 + 7\bar{R}^{(0)})}{1 + \bar{R}^{(0)}} \frac{\partial_t \nabla \rho_\gamma^{(1)}}{\rho_\gamma^{(0)2}} + \bar{R}^{(0)} \int dt' \frac{1}{(1 + \bar{R}^{(0)})^2 a^2} \frac{\nabla \left(\nabla^2 \rho_\gamma^{(1)} \right)}{\rho_\gamma^{(0)2}} \right]$$

全ての量が普通の
物理量で表された！

オーダー評価

$$\begin{aligned}\Delta^{(I,1)} &\sim \left| \delta \vec{v}_{\gamma b}^{(1)} \right| \sim \frac{1}{4} \frac{m_p}{\sigma_T \rho_\gamma^{(0)}} \frac{k^2}{a^2 H} \delta_\gamma = \frac{1}{4} \frac{k^2 \tau_T}{a^2 H} \delta_\gamma \\ &\sim 7 \times 10^{-13} \left(\frac{k}{aH} \right)^2 \left(\frac{1+z}{10^5} \right)^{-1}\end{aligned}$$

$$\begin{aligned}\left| \frac{\rho^{(1)}}{en_b^{(0)}} \right| &\sim \left| \delta \vec{v}_{pe}^{(1)} \right| \sim \frac{m_p}{4e^2 n_b^{(0)}} \frac{k^2}{a^2} \delta_\gamma = \frac{1}{4\beta} \frac{k^2}{a^2 \omega_p^2} \delta_\gamma \\ &\sim 9 \times 10^{-40} \left(\frac{k}{aH} \right)^2 \left(\frac{1+z}{10^5} \right)^3\end{aligned}$$

$$\tau_C = \frac{1}{\omega_p^2 \eta} = 4 \times 10^{-3} \text{ sec} \left(\frac{1+z}{10^5} \right)^{-\frac{3}{2}}$$

$$\tau_T = \frac{m_p}{\sigma_T \rho_\gamma} = 10^3 \text{ sec} \left(\frac{1+z}{10^5} \right)^{-4}$$

$$H^{-1} = 4.5 \times 10^9 \text{ sec} \left(\frac{1+z}{10^5} \right)^{-2}$$

電磁氣的量は
suppressされすぎ？

宇宙論的摂動

強結合近似① $H\tau_C$

$$\vec{E}^{(1)} = \frac{m_e}{e(1+\beta)} \cancel{\partial_t \delta \vec{v}_{pe}^{(1)}} + en_b^{(0)} \eta_{\text{eff}}^{(0)} \delta \vec{v}_{pe}^{(1)} + \vec{C}^{(1)}$$

強結合近似② $H\eta$

$$\eta_{\text{eff}}^{(0)} \left[\cancel{\partial_t \delta n_{pe}^{(1)}} + \cancel{3H \delta n_{pe}^{(1)}} \right] + \delta n_{pe}^{(1)} = \frac{1}{ea} \nabla \cdot \vec{C}^{(1)}$$

結局、

$$H\tau_C \times H\eta = \frac{H^2}{\omega_p^2}$$

でsuppressされることになる。これは電場のせい。

まとめ

- 強結合近似で光子とバリオンの速度差を求めた
- ・全ての量が普通の1次量で表された
 - ・磁場生成は強結合2次から
 - ・電磁氣的量は単なるクーロン強結合パラメータよりさらにsuppressされている

6、宇宙磁場の観測と・・・

磁場の観測

初期宇宙で生成された磁場を観測したい

- ・理論の検証
- ・磁場で初期宇宙を探る？

問題

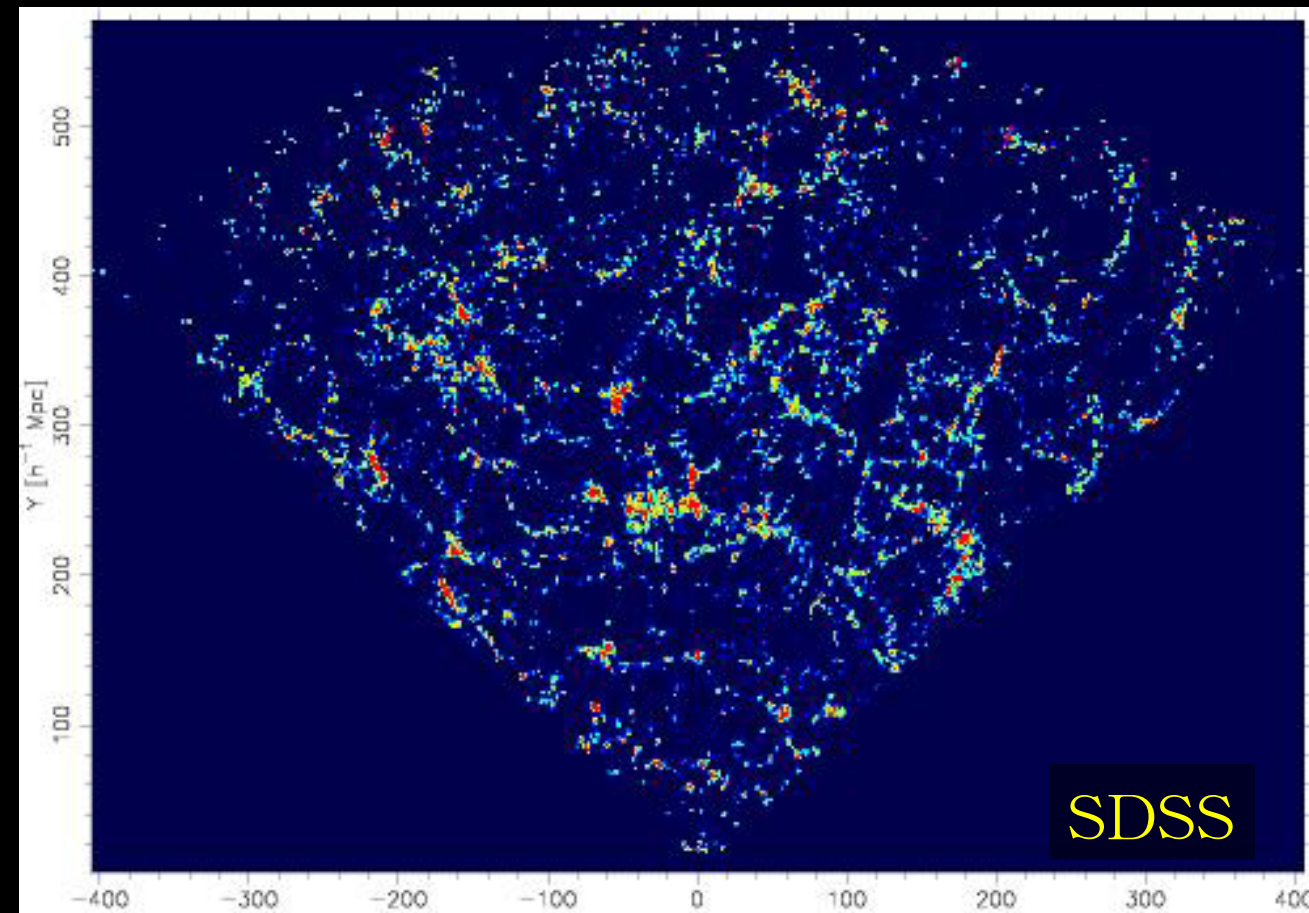
- ・生成されたときの情報は残っているか？
- ・そんな弱い磁場を観測できるか？

問題1：情報は残っているか？

収縮・乱流に巻き込まれるとスペクトルは変化する

濃い領域（銀河・銀河団）→ ダメ

薄い領域（void）→ OK？



- 宇宙の40%
- 典型的には10Mpc
- 密度が平均より小さいのでeffectiveに反重力
→ ゆらぎは線形のまま
- 紫外線に満ちている
→ ガスはなかなかcollapseできない
- 他に磁場源はなさそう

問題2：弱い磁場を観測できるか？

CMB・Faraday rotation

→ 現在の制限： $B < 1\text{nG}$

→ 望み薄

Plagaの方法 (Plaga, 1994)

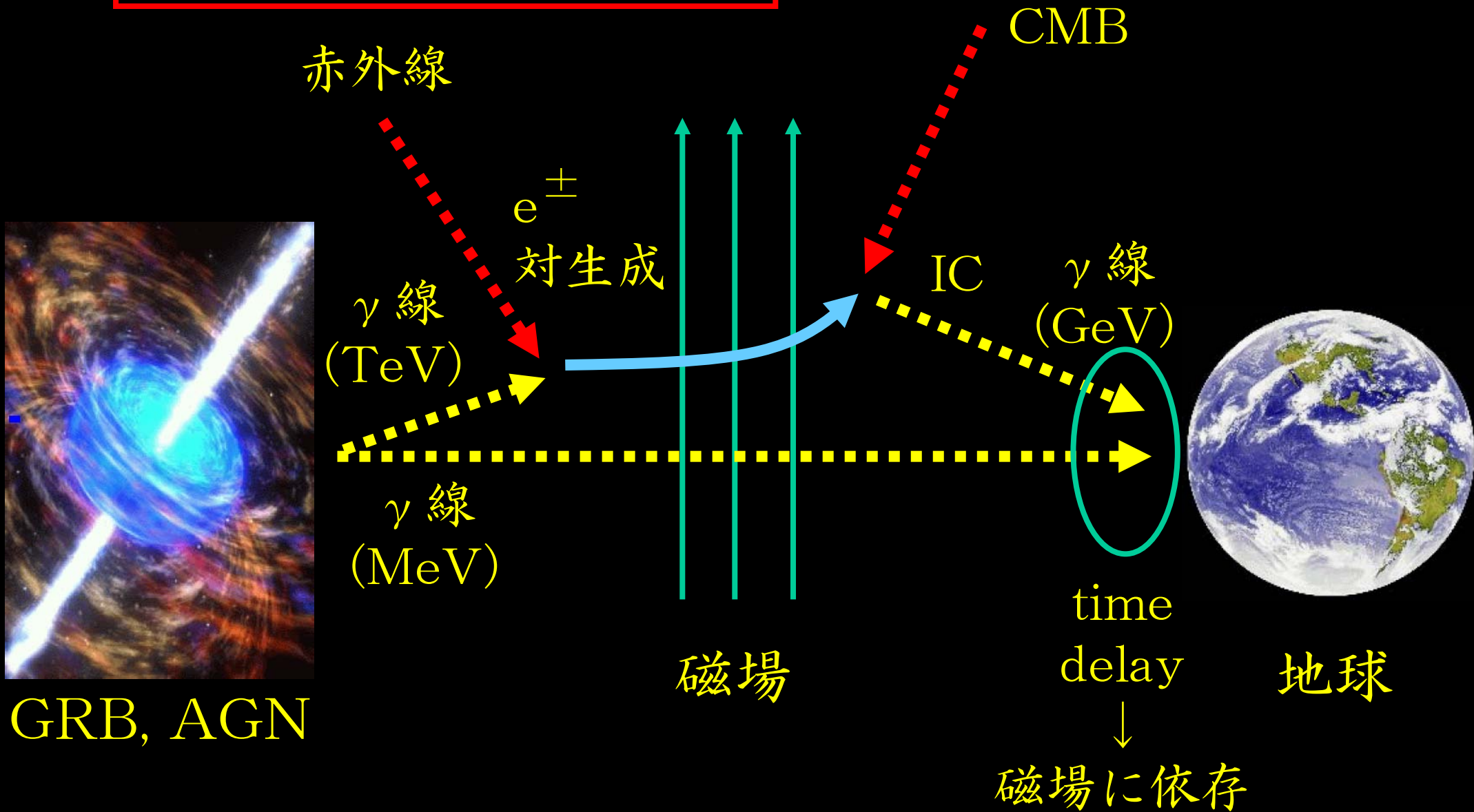
GRB、blazarなど高エネルギーバースト
天体からのdelayed photonを使って
非常に弱い磁場を測る

→ $B = 10^{-15} \sim 10^{-20}\text{G}$

→ 現在のところ最も強力な方法

(Ichiki, Inoue & KT, in progress)

Plagaの方法概念図 1



ターゲット

GRB・AGN

~ 50Mpc

地球



AGNの方が
やりやすい?

概念図 2

赤外線

$$E_{\text{IR}} = 0.1\text{eV} \left(\frac{E_\gamma}{1\text{TeV}} \right)^{-1}$$

CMB

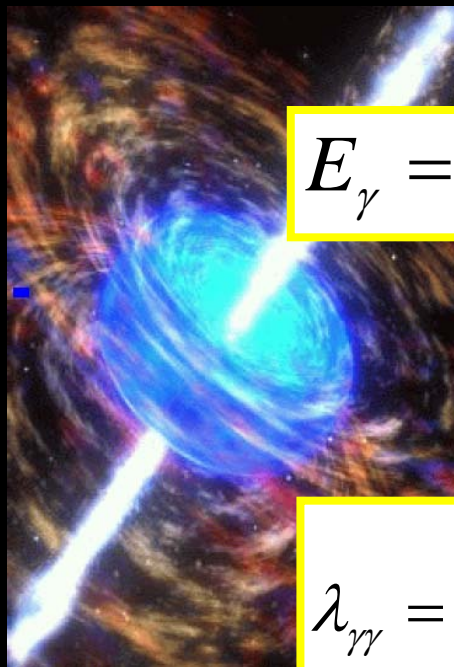
$$E_{\text{delay}} = 1\text{GeV} \left(\frac{E_\gamma}{1\text{TeV}} \right)^2$$

$$E_\gamma = 1\text{TeV}$$

$$\lambda_{\gamma\gamma} = 6\text{Mpc} \left(\frac{n_{\text{IR}}}{1\text{cm}^{-3}} \right)^{-1}$$

$$\lambda_{\text{IC}} = 1\text{Mpc} \left(\frac{E_\gamma}{1\text{TeV}} \right)^{-1}$$

$$\Delta t_B = 10^3 \text{sec} \left(\frac{E_{\text{delay}}}{1\text{GeV}} \right)^{-2} \left(\frac{B}{10^{-18} \text{G}} \right)^2$$



いろいろな数字 1

$$E_\gamma = 1\text{TeV}$$

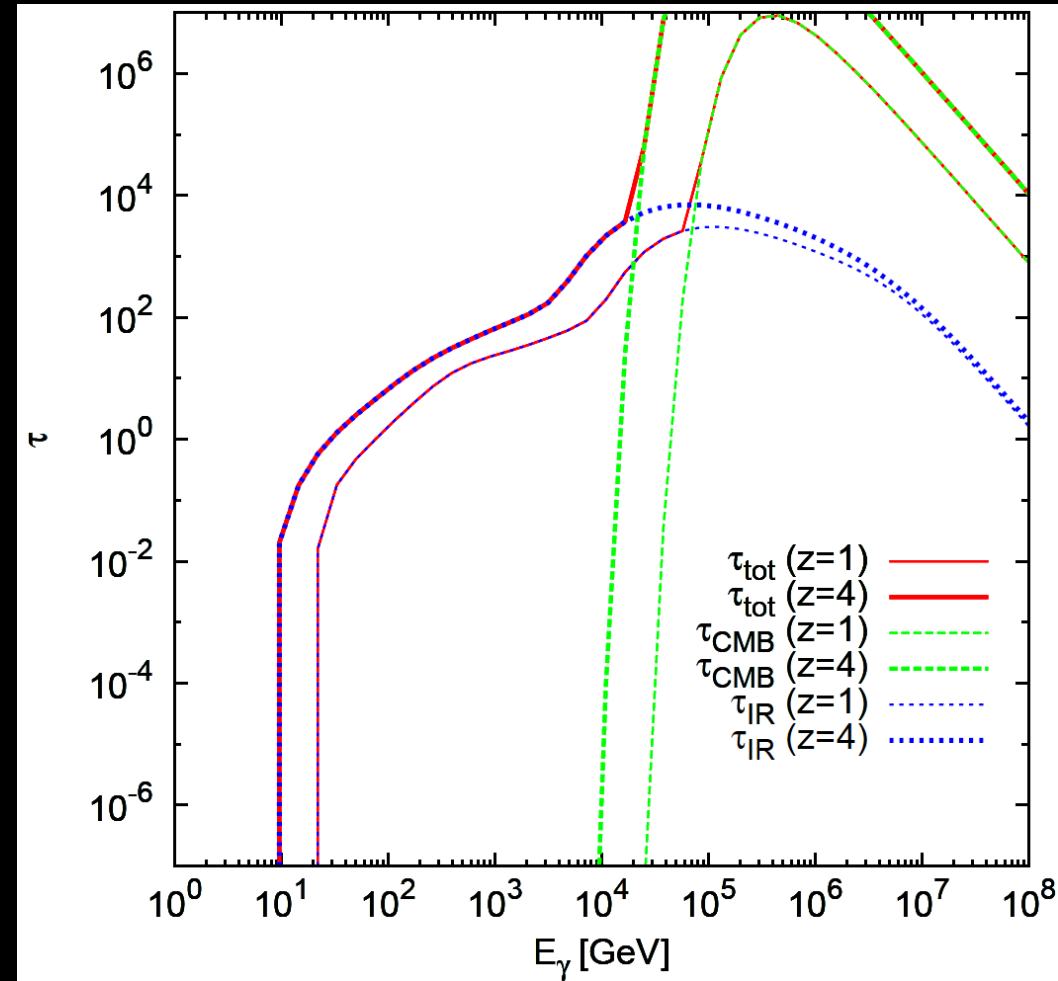
- TeV blazar
- GRBではパラメータ次第でTeVが出るのは割と自然

$$E_{\text{IR}} = 10^{-1}\text{eV} \left(\frac{E_\gamma}{1\text{TeV}} \right)^{-1}$$

- COBEでわりとよく観測

$$E_{\text{delay}} = 1\text{GeV} \left(\frac{E_\gamma}{1\text{TeV}} \right)^2$$

- GLASTなど衛星の領域。
もう少し高いと地上のチェレンコフ望遠鏡の領域。



いろいろな数字2

$$\lambda_{\gamma\gamma} = 6\text{Mpc} \left(\frac{n_{\text{IR}}}{1\text{cm}^{-3}} \right)^{-1}$$

- ・天体付近の濃い領域から出るのに十分大きい

$$\lambda_{\text{IC}} = 1\text{Mpc} \left(\frac{E_{\gamma}}{1\text{TeV}} \right)^{-1}$$

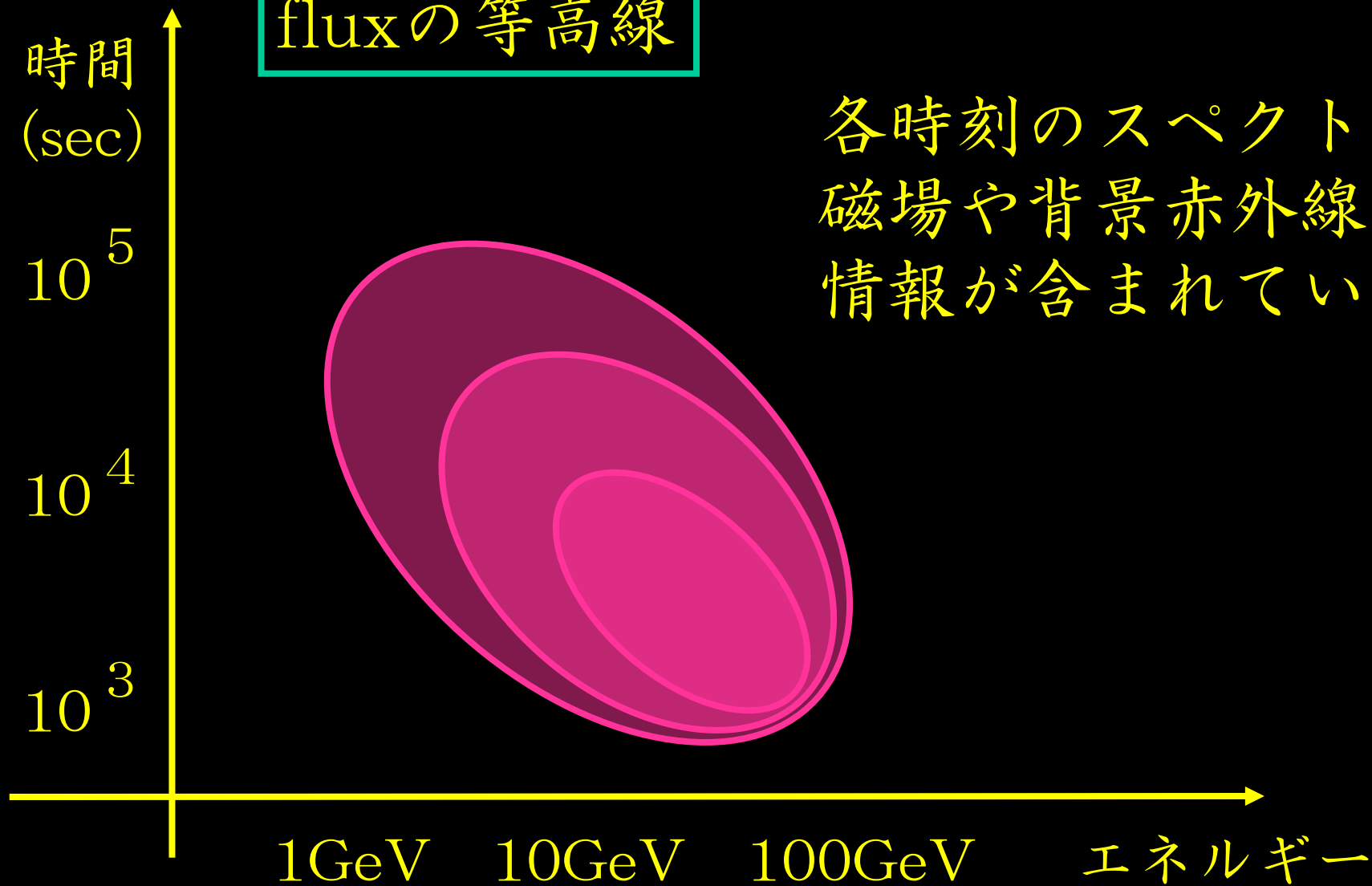
- ・上と合わせても基本的に反応はlocal

$$\Delta t_B = 10^3 \text{sec} \left(\frac{E_{\text{delay}}}{1\text{GeV}} \right)^{-2} \left(\frac{B}{10^{-18} \text{G}} \right)^2$$

- ・強い（弱い）磁場は高（低）エネルギー γ 線で見える
- ・高エネルギー天体固有の時間スケールより大きくなければならない

観測量

fluxの等高線

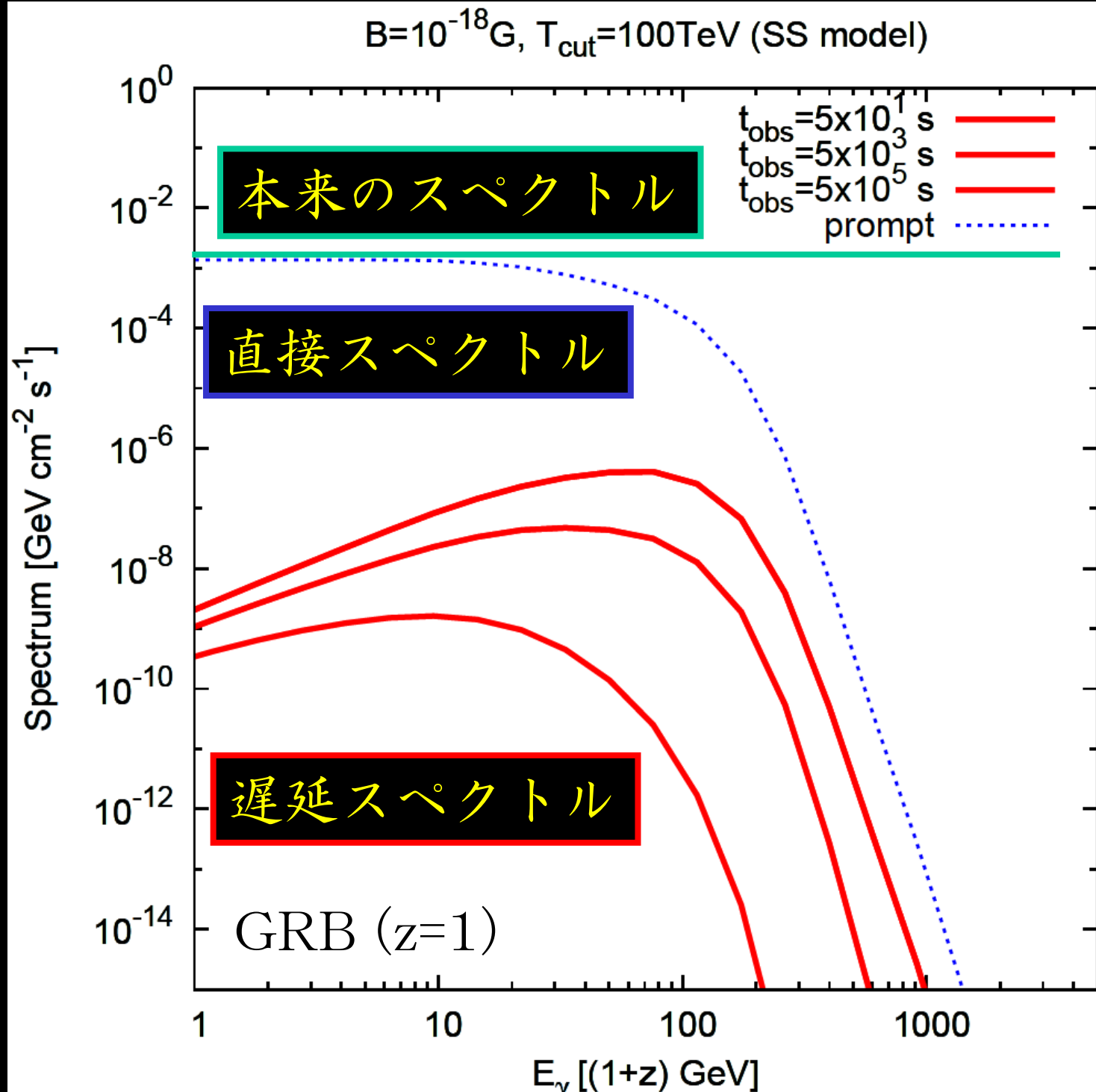


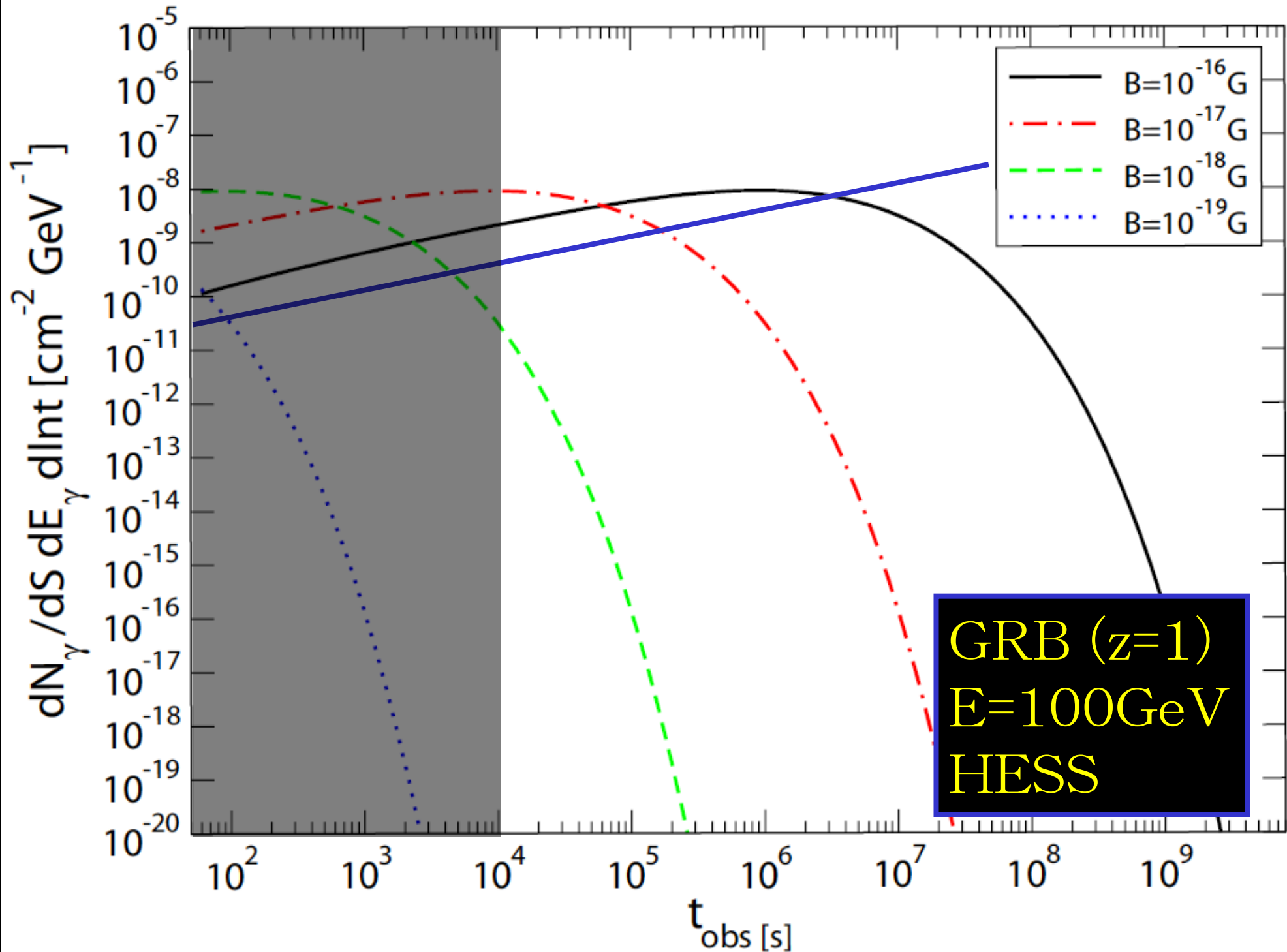
各時刻のスペクトルに
磁場や背景赤外線の
情報が含まれている

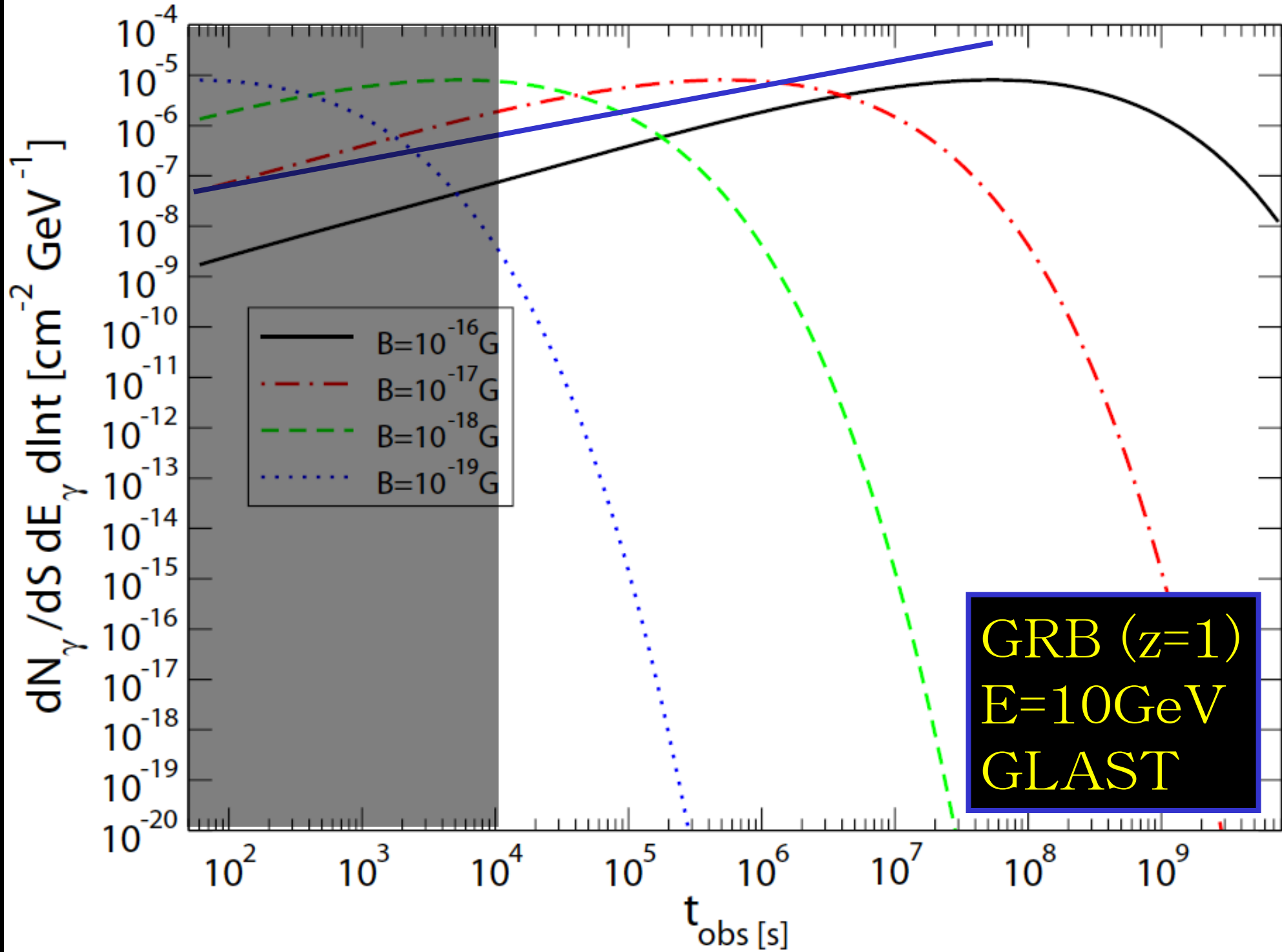
スペクトル

スペクトルの 時間発展

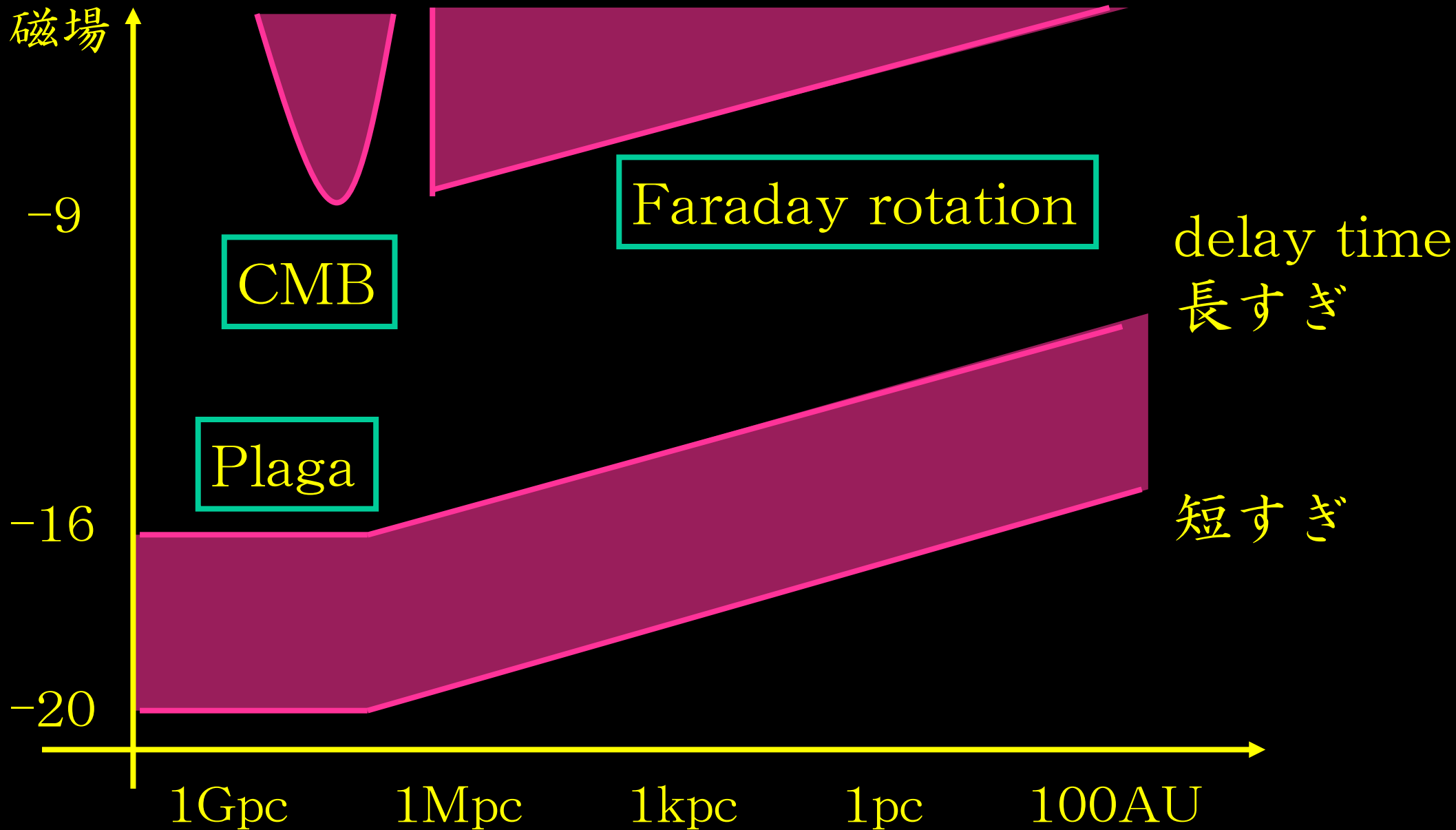
- 10GeV以上で直接のガンマ線は吸収される
- 遅延スペクトルのピークは時間とともに低エネルギーになる







non-detectionによる制限



2次摂動で1次摂動を探る

2次の重力波や磁場スペクトルは
原始ゆらぎスペクトルに依存

$$P_{\text{GW}}^{(2)}, P_B^{(2)} \propto P_{\mathcal{R}}^2$$

-
- ・重力波・磁場を観測すれば原始ゆらぎを観測できる
 - ・しかも2次のスペクトルは1次のスペクトルに敏感

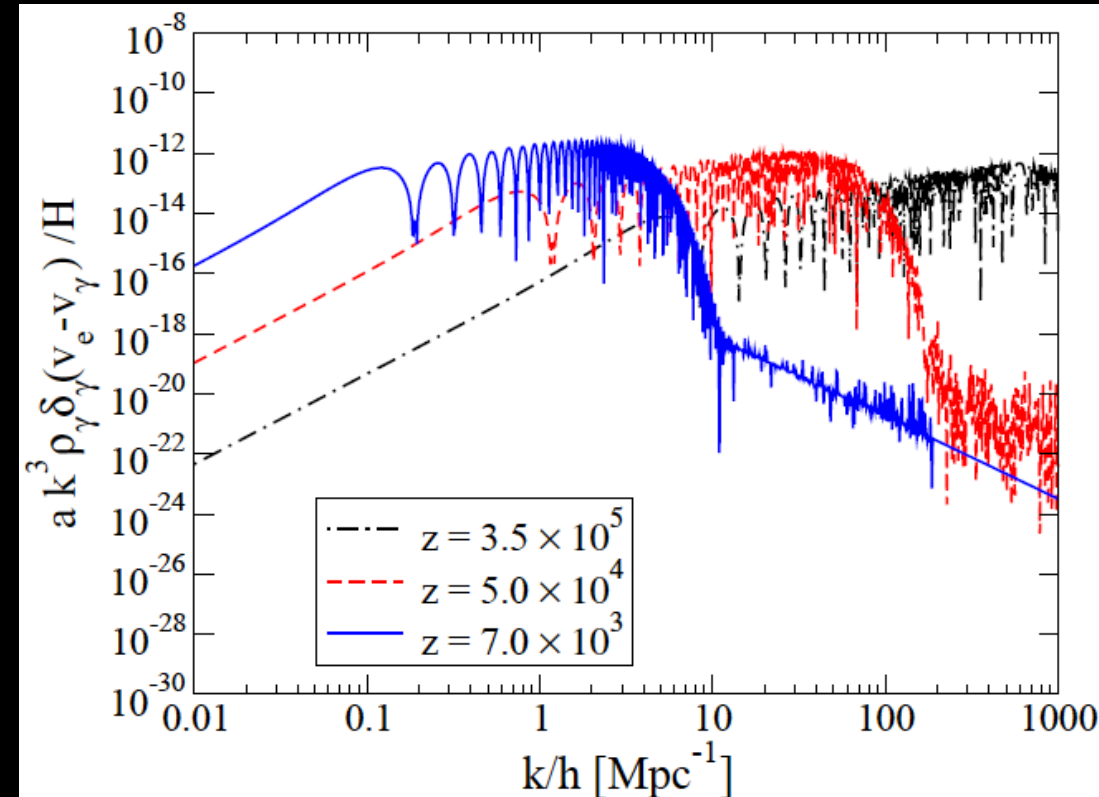
基本的なアイデア

CMB ゆらぎ

- decouplingのときのsnap shot
- 小スケールではSilk dampingで
かき消される

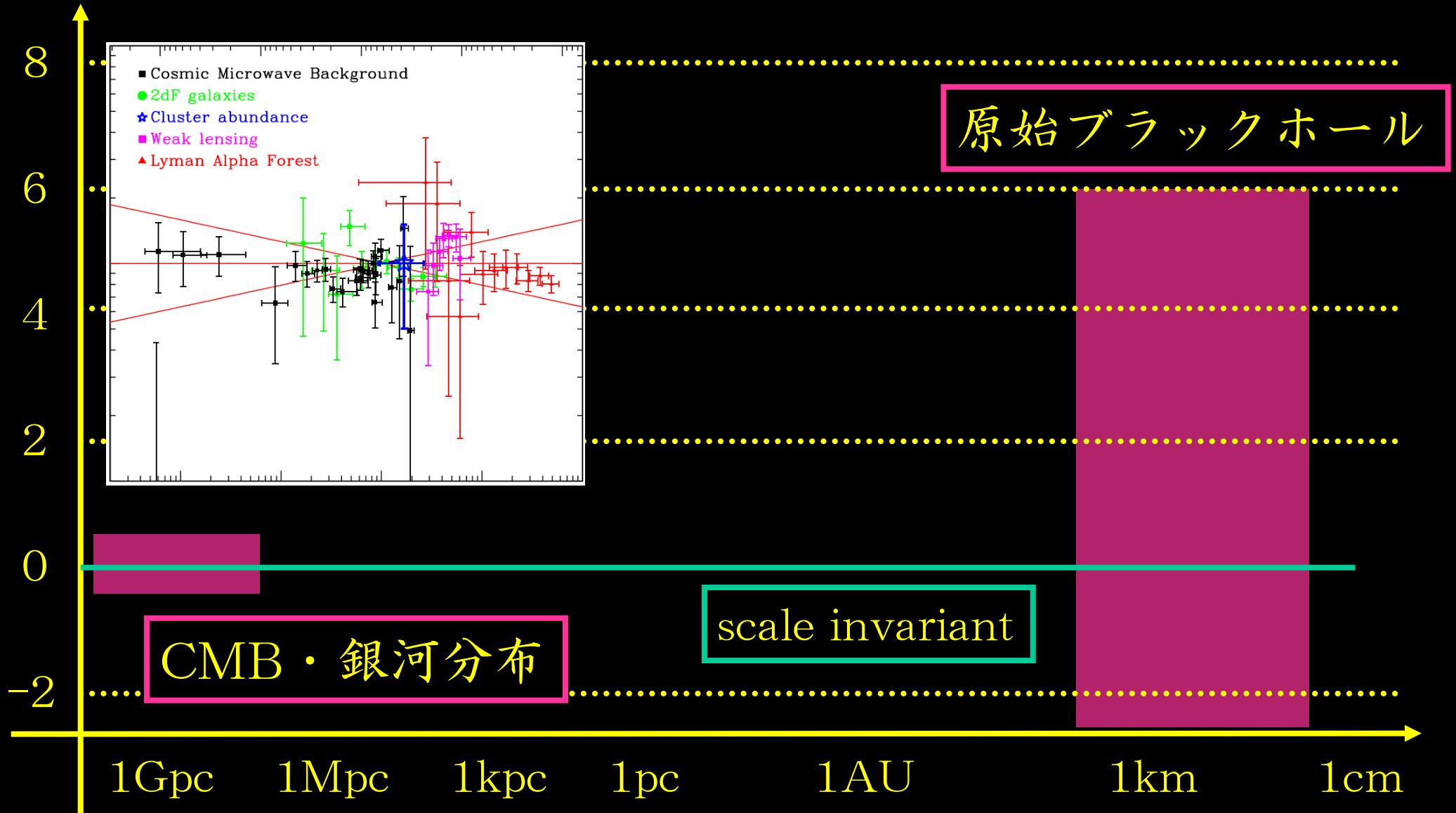
磁場・重力波

- snap shotの積分
- 散逸はあまり効かず、
小スケールまで磁場は
そのまま残る
→ 小スケール観測
が可能



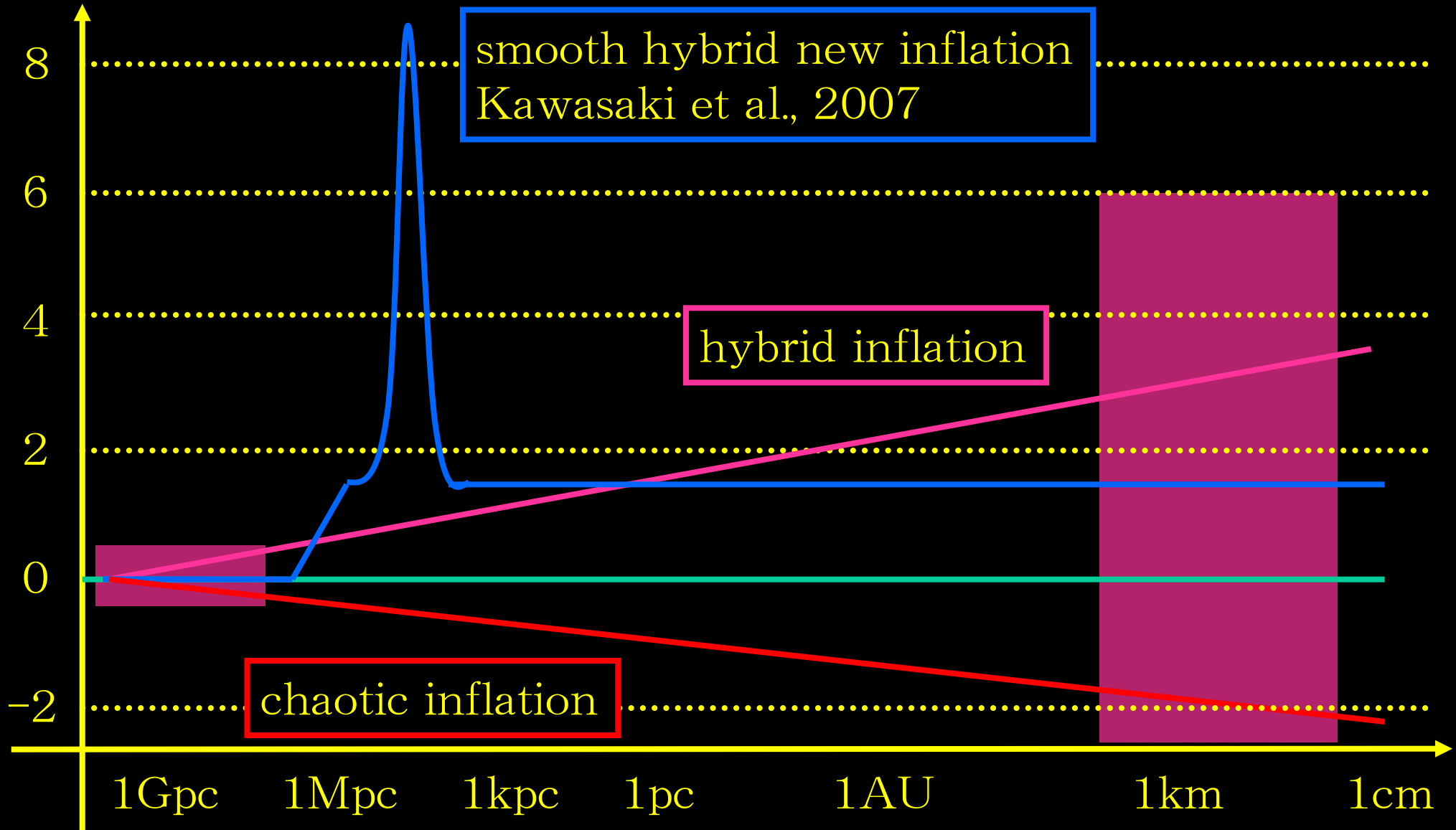
現在のゆらぎへの制限

$P(k)$



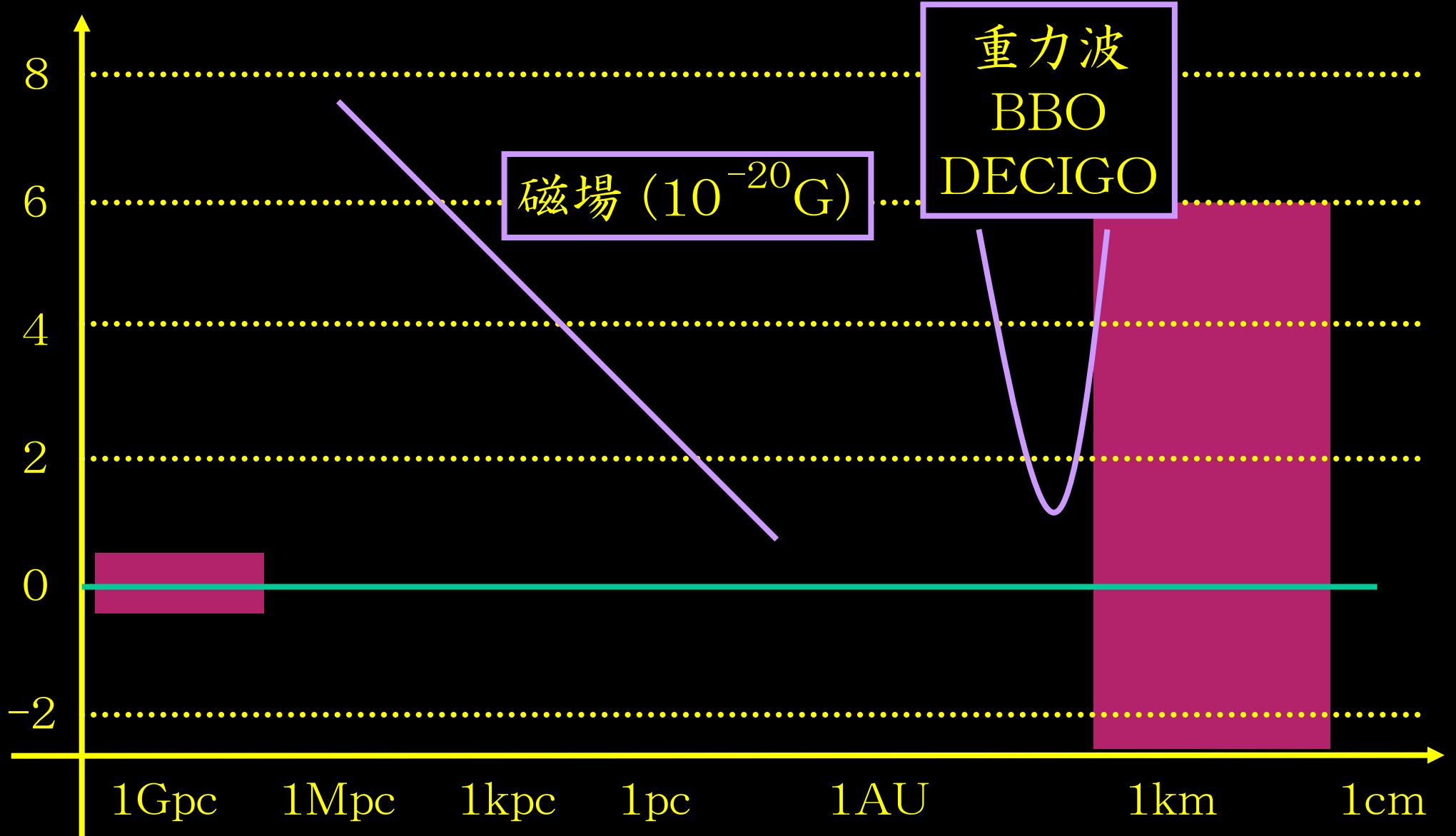
様々なインフレーションモデル

$P(k)$



ゆらぎへの制限 (超楽観的)

P(k)



磁場 (10^{-20} G)

重力波
BBO
DECIGO

1Gpc

1Mpc

1kpc

1pc

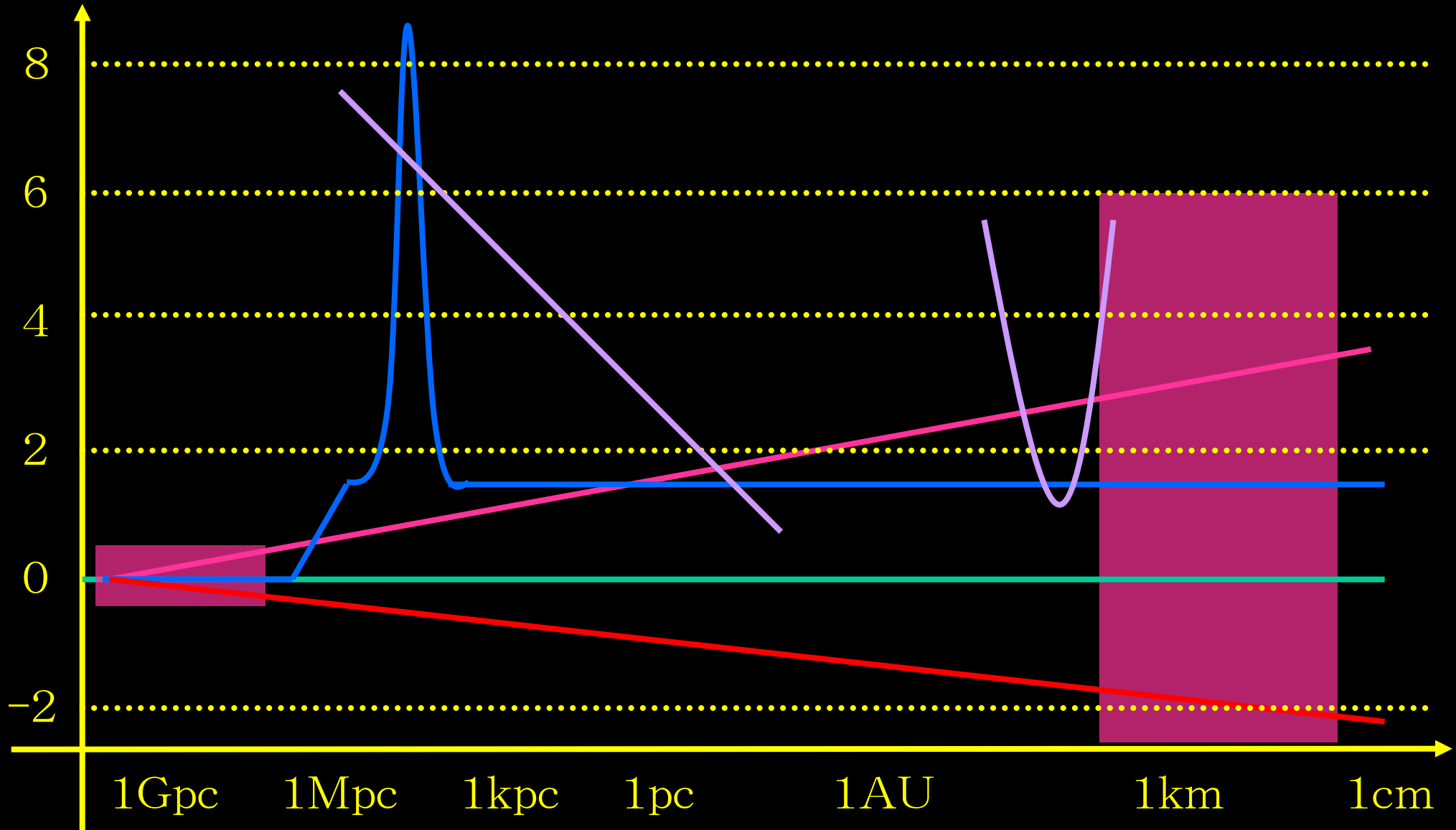
1AU

1km

1cm

インフレーションモデルへの制限

$P(k)$



まとめ

- ・ 高エネルギー天体からの遅延光子を使って微弱な磁場を観測
- ・ モンテカルロをやる
 - カンガルーとかGLASTにお願いに行く
- ・ 2次スペクトルは1次スペクトルに強く依存
- ・ 磁場と重力波はかなり小さなスケールの観測が原理的には可能
- ・ Plagaの方法による磁場観測 ～ 数年？
- ・ 重力波の直接観測 ～ 数十年？数百年？

こんな小スケールの情報は他では得られないのでやる価値はある（と思う）

7、まとめ

まとめ

- 1、初期宇宙プラズマのゆらぎによる磁場の生成
 - ・宇宙論的摂動2次
 - ・トムソン強結合近似2次
- 2、磁場だけでなく他の電磁氣的性質を求める
 - ・クーロン強結合パラメータよりさらに suppress される
- 3、高エネルギー天体による弱い磁場の測定
 - ・まず方法論の確立をめざす
- 4、2次摂動によって1次摂動を探りたい
 - ・小スケールを探る貴重な方法

終了